

おれナルト。木の葉がヤバい。

焼酎臭いマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしナルトが頭脳派（笑）ニートだったら。もしサスケが原作を遥かに超える厨二病だったら。もしあのキャラが…

そんな、もしも世界のナルトです。

注、ナルトが四代目火影の息子である事は割と知られています。噂程度ですが！

※登場人物のキャラが大幅に変わっているため、原作を大切にしたい方はブラウザバックを推奨します。

目次

第一話	おれナルト。働きたくない。	1
第二話	ラーメンはタダで食うもの	9
第三話	早くも崩れかけ？おれの仮面は鋼で出来てるんだぞっ！	18
第四話	【悲報】寝て起きたら指名手配されてた	33
第五話	お前の罪を数えてやる！一個！！	43
閑話	いつの時代も友達は必要である。	56
第六話	七って数字をラッキーセブンって最初に言った奴。ちよつとこい話がある。	63
第七話	戦闘回は文字数が増えがち	76

第一話

おれナルト。働きたくない。

おれはうずまきナルト。忍び五大国の一つ、火の国に所属するごく普通の忍者の卵である。

なに、ちよつと体の中にかつて里に壊滅的な被害をもたらした天災、九尾の化け物こと九喇嘛が封印されていて、父親に四代目火影をもつだけの、ごく普通の少年ジャンプ誌の主人公だ。

しかし、これだけの主人公設定を持ちながらも、幼少期から里の大人達に執拗な嫌がらせを受け続け、逃げるように入居者の少ないボロアパートで一人、貧乏暮らしをしているのが現状である。

おれの血筋はいわば王家。他作品で言えば生まれながらにして勝ち組。何不自由ない生活が送れるはずだというのにこの仕打ちはなんだ。

今すぐおれを差別してきた奴らをまとめて不敬罪でしょつびきたいところではあるが、あいにくおれに王位は継承されていない。

まあ、そんなどうでもいいことは置いといて、おれの自己紹介を続けようか。

皆さんご存知九尾ハブで幼い頃より頼れる大人がごくわずかだったおれは、生きるためにそれは多くの知識、技術を身につけた。

掃除に洗濯、料理と家事に始まり、中忍レベルの忍術に体術、武器術、幻術。さらには暗部が行うような隠遁に暗号解読術、暗殺術。うずまき一族御用たしの封印術。

その他にも兵糧丸ソムリエや手裏剣鑑定士の資格も手に入れた。

九喇嘛とも少しずつ会話をするようになった。

そして、ある程度一人でも生きていけるようになった時。

おれは、そこそこなエリートになっていた。

木の葉忍者アカデミー。火の国の国立学校であり、忍びを目指す子供たちが一同に集う学舎である。

おれことうずまきナルトも当然この生徒だ。

もちろん、ここに通って学べることは特でない。すべて、既に習得済みだ。

しかし、今はせっかくの平和な時代。

音に聞くはたけカカシやうちはイタチのように無理して飛び級を狙う必要はなく、人柱力であるため国の最重要人物であるおれはなんと授業料と給食費が無料。

さらにアカデミーは、自宅のボロアパートよりも設備が良く、夏は冷房が、冬には暖房がちゃんと入っている。

これだけの良物件なのだ。つついっい落ちこぼれを演じ、卒業試験を三回も落第してしまうおれを誰が責められようか。

おっと。説明していなかったことだが、おれは里では落ちこぼれを演じている。

もちろん、火影や一部の上層部はおれが実力を隠していることを把握しているが、今の状況を否定するのは彼らにとって都合が悪いだろう。

里の英雄の息子としての立場、多くの同胞の仇をその身に宿す人柱力としての立場。二つの相反する立場をもつおれは、この国において政治的に非常にデリケートな存在だ。

敬愛の対象にも抹殺の対象にもなりうる。里の上層部はおれの扱いにさぞかし頭を悩ませていることだろう。

そこで、「落ちこぼれ」という肩書きが効いてくる。

偉大な忍びの子息だからこそ、それが無能であれば一般人以上に蔑まれるのは、忍びの世界において常識である。

おれが「落ちこぼれる」ことで、市民の九尾に対する度を越えた嫌

悪を、表向きには、優秀な親を持ちながらも無能でしかない息子に対する侮蔑として処理することが可能になるとしたらどうだ。

わかりやすく言えば、市民が「このクソ化けぎつねが！死ね！」と思っておれを差別しようが、対外的には「だってあいつ四代目の息子なのにクズだからしょうがない」で通して見過ごせるようになるというものである。

つまるところ、おれが無能なふりをする事で、里はおれを差別する市民を正当化する大義名分を得られるわけだ。

本来なら先代火影の息子様が差別の対象となるなどもつてのほか。ストレス解消におれをいじめる中流階級の人々は、波風ミナトを尊敬する忍びたちにとって里の癌にも等しいだろう。

おれの演技は民の行為の異常性を緩和するとともに、ミナト信者の皆さんがおれに失望し、興味を失うというオマケまでつけてくれる優れものだ。

結果として、チームミナトと中流階級の対立を防げることが可能だとすれば、もはやトップ層にこれを止める理由はない。

だからおれのアカデミーでの態度について口を出すこともないし、生活支援を続けるしかない。

本当に、オヤジは偉大な忍びである。

おれにとって、アカデミーは必然の生んだ楽園。

ここではタダで飯が食えるし、暑さも寒さもしのげる。

できればずっとアカデミー生でいて、国の金で生活をしたいたいものだ。

ああ、アカデミー様。これからもおれにご加護を。ご慈悲を。

「うずまきナルト。火影様がお呼びだ。」

しかし。おれが落ちこぼれることは里にとってプラスであるにも関わらず。おれのこのニート体質を改善して立派な忍びに育て上げよう、と父の前任者に度々呼び出されているおれは、不本意ながら「かまちよないたずら小僧」としての汚名まで里に知れ渡っているのである。

「さて、ナルトよ……」

ここは火影のスイートルーム。スイートとは名ばかりの資料と巻物で堅苦しい内装。そしておじいちゃん家特有の線香の匂い。

ここはおれにとって、見慣れた説教部屋である。

今、眼前におわすのは三代目火影、猿飛ヒルゼン様だ。

これから始まるありがたいお言葉を考えると、ありがたすぎて涙が出そうである。

「お主……。ワシがこの間言ったことを覚えておるかの？」

愚問である。おれが一度聞いたことを忘れるはずもない。

「ええ。今度の卒業試験は合格しないと、流石にワシも庇いきれないと。確かそうおっしゃっていたと記憶していますが。」

「いや。覚えてるなら聞こうよ！ワシ言ったよね！これ以上はまずいって！ダンゾウ達が動き出すかもしれないからやばいって！なんでかなあ!？」

落ち着け一国の主。

確かにダンゾウ一派はおれにとって少々厄介な存在である。

彼らは、実力がありながら表舞台に出ようとしないうれを、いずれは国家に刃向かうテロリストとなりうるのでは、と危険視する優しいおじさん達だ。

火影様はダンゾウ一派に標的にされるリスクを鑑み、おれに早々に下忍になることを薦めてくるというわけだ。

ずっと、前からである。

「はい。ですから尽力したのですが一歩及ばず…不合格という形に…」

「そんなわけないじゃん！だってお主に修行つけたのワシだし！お主の実力はワシが一番よう知つとるし！そんな、わけ、ないじゃん!!!」

そうなのだ。実はおれが年齢不相応の域に達している理由。

何を隠そう、目の前で何やらまくし立てているプロフェッサーのおかげなのである。

「いやほんとなんでかなあ!?ワシ、この前ダンゾウの奴になんて言われたかわかる?『ヒルゼン。お前弟子ひとりすら独り立ちさせられんのか?…フツ。老いたな。いつでもワシが代わってやる。』って!!!言われたの!!わかる!!この屈辱!!あいつには舐められたくないの!!ほんと!!頼むから!言うこと聞いてちょうだいよ!!ラーメン!ほら!あれ奢るから!」

テロリスト予備軍のくだりはなんだったのか。

結局は火影様とダンゾウ様の意地の張り合いである。巻き込まれるおれの身にもなって欲しい。

それとせつかくダンゾウに変化してまで披露したモノマネだが、余りにお粗末だったためスルーしておいた。

しかしラーメンとは大きく出たな。あの一杯はおよそ数ヶ月分の食費の価値があると言つてもいいほど。それほどのものだ、ラーメンとは。

だが俺を動かすにはまだ足りない。

それほどに一年間の無料食費パスと光熱費無料キャンペーンは手放せないのだ。

「…いいもん！ワシにだって考えがあるし！」

さあ、どうあがくつもりだ？扶養者よ。この悪性腫瘍をどう切除する？

「うみのイルカを呼ぶ。」

そうきたか。

うみのイルカ。木の葉の黎き戦艦と呼ばれた上忍であり、数々の偉業を成した傑物だ。

たしか幻の秘境を発見してナマズ仙人になったとか。たったひとりで敵国の基地を潰したとか。その水遁は国を滅ぼす規模をもち、かの二代目火影のそれを上回るとか。

噂は忍界各地に広まっており、コピー忍者はたけカカシに並ぶ木の葉の有名人である。

「奴は利き腕を失つての。戦いの前線から離れることになったのじゃ。しかし奴ほどの男をそのまま腐らせておくには惜しい。そこで次世代の忍びを育成するアカデミーの教師として迎え入れることとなったのじゃ。」

いや、その展開はおかしい。GTO先輩もびつくりの教師物語の出来上がりだ。

「もちろん！奴はお主の事情こそ知らんが：強者故の慧眼がある！今年こそは逃れられると思うなよ！ナルトよ!!」

いや、事情は伝えるべきではないだろうか。これだから木の葉の里は恐ろしい。知る権利が認められないブラック帝国である。

しかし困ったことになった。おれの苦手なものに一つ、実力者がある。子供程度の演技なら簡単に看破される恐れがあるためだ。

それに、うみのイルカは片腕を失ってもなお里の為に働こうとするいかれた社畜精神の持ち主だ。

おれの行動を許さんとし、あらゆる手を使っておれを里に利益をもたらす優秀な忍びに育てようとするだろう。

そう、まるでブラックバイトに無駄に全身全霊を注ぎ、使える後輩を育てる事とバイト仲間でのボーリング大会を至上の喜びとする変態クソバイトリーダーのように。

残された道は一つだ。

この一年、なんとか奴をやり過ぎす。

これを目標に頑張るしかない。

頑張つて、落ちこぼれるしかない。

おれは部屋を退出した。その際におれを連れてきた忍びが困った顔をしていたので、うちはせんべいをわけてあげた。

夕日が差し込む執務室。猿飛ヒルゼンは今年のアカデミー生達の

資料を眺めていた。

その顔には、西日にくつきりと主張された深い皺が刻まれている。

「今年の卒業学年は癖が強い連中ばかりじゃ。今までのようには行かんぞ。ナルト。…でもあいつら手に負えないからのお。ナルトの方がまだ可愛いわ。さてさて、どうなることやら。」

一人つぶやく火影の背中には、やけに哀愁が漂っていた。

第二話

ラーメンはタダで食うもの

お久しぶり。ナルトだ。

師匠こと火影のじっちゃんに呼び出されてからはや数ヶ月。

アカデミーは新世代を迎えていた。

まあ、いくら同期とはいえど、今回ももちろん卒業試験はスルーするつもりだし、特別仲良くしてやる必要もないだろう。意識高い系は意識高い系とつるんでウエイウエイするがいい。

おれは一人でまったりしたいのだ。

「よお、ナルト。ラーメン食いいくぞー！一楽！」

：しかし、中にはこうやって頻繁に構ってくる大人もいる。大人って不思議だ。

所変わってここはラーメン一楽。木の葉の里ができる前からある老舗だ。他のラーメン屋とは一風変わっているが味は確かであり、密かにラーメン通の間で評判が良い。

俺のオススメはやはり味噌ラーメン。ここの看板メニューでもあり、確かな技術と費やした歳月を感じさせる一品だ。

木の葉の里に来る機会があれば、是非一度食べてみて欲しい。

しかし、今日も今日とて独特な内装である。

店内ではジャズだかレゲエだかよくわからない謎のBGMが流れている。

備え付けのテレビは流行りのドラマも野球の試合も見せてはくれない。

ただひたすらに、雲隠れの忍びたちをキャストとする通販番組が繰り返されている。一体誰に需要があるのか。

おっと。気づかないうちにラーメンが来ていたようだ。相変わらずここの大將は仕事が早い。

冷めないうちにいただくのでしょうか。

「やっぱ一樂のラーメンはうめえな！」

「そうですね。この味は筆舌に尽くし難いです。それでもあえて言葉にするなら…まずスープが人知を超えている。味噌をベースに数種類のスパイスを加えた極上のスープはそれだけで食卓の主役となり得るほど。そのスープと絡み合う麺はまるで水の国の七宝うどんのようにコシが強くしなやかで老若男女問わず…」

「わかったわかった。いつからおまえはラーメン評論家になったんだ？しかも微妙に食レポが下手い。そんなくらいでやめろ。だるい。」

だるいとはなんだ。ヘタクソとはなんだ。ラーメンとおれに謝って貰おうか。主にラーメンを重点的に。

「まあ奢ってもらおう身としてはあなたの要望に応えなくてはですね、イルカ先生。」

「おれまだ奢るって言ってねえぞ！まあ奢るがよ。」

うみのイルカ。独身。今年から赴任してきたアカデミーの先生である。もと上忍の実力と面倒見の良さ、教え方のうまさからすぐに生

徒に気に入られ、今ではアカデミー生の引つ張りだこだ。イルカなのに。

そして、そんな人気者の先生だが、度々こうやっておれに絡んでくるのだ。

そして、三代目火影と同じく、おれに説教をくださる男でもある。

まさか、おれの行きつけのラーメン屋が第二の説教部屋になるとは、一体誰が予想できようか。

とはいえ冷めてしまつては元も子もないため、いつも彼の説教は片手間に聞くことにしている。

そう、まるで川のせせらぎのBGMを聞きながら受験勉強をする学生のようにな。

「…なあ、ナルトよお。」

煩わしいせせらぎだな。味の世界に入つて来るのはやめて貰おうか。

「おまえさあ、とつとと下忍になれよ。んで中忍試験受ける。実力、隠してんのはわかつてんだぞ?」

彼の生徒になつてしばらくたった頃。手裏剣術の時間に、わざと的に当てないよう適当に手裏剣を放つていたおれを見て、おれの実力を知るに至つたという。

何やら投げ方がぎこちなかったとか。出来ることを無理やりしてないように見えたそうだ。何それ凄い。

今まで教鞭をとっていたサラサラヘアー真ん中分けの男前教師は呆れたような表情を浮かべるだけで、疑うことすらしなかったのに。

元気かな。ミズキ先生。

とはいえ疑念を持たれたのは初対面の頃だというから大変だ。本当に強い忍びは見ただけで他人の実力がある程度測れるという神話

があるが、まさか実在するなんて。

きつと彼が神様なんだろう。ラーメンを何度も施す、小麦粉の神様。

収穫期には田畑に奉られ、奉納品としてその年採れた一番出来のいい小麦を献上するのだ。

「何度も言ってますが買いかぶりすぎですよ。おれはそんな器用な人間ではありません。ごく普通の穀潰しです。」

「穀潰しなんじゃねえかよ。働け、おい。ちったあおれを見習えよ。片腕になってもお国のために働いてんだぞ?」

「そうですね。その忠誠心には本当に驚愕するばかりです。では将来はあなたと同じアカデミーの教師でも目指すことにしますか。」

「…おまえ、給食タダで食い続けたいだけだろ。ダメだ。許さん。おまえは必死に修行して必死に任務やって、腹ん中の九尾も制して、そんでいつか里一番の忍びになれ。四代目の、ミナトさんの息子だろ。そんなくらいになって当然のモンをもつてんだよ。お前は。」

「おれに父をついで火影になれとおっしゃいますか。面白い見解ですが、あなたは重要な事を見落としています。一つ。そもそも見習うべき親父の事をおれが全く知らないこと。二つ。おれ、里一番の嫌われ者です。」

実際親父にはこの素晴らしいアカデミー生活とラーメン好きのおれにふさわしいナルトという名前をプレゼントして貰ったという恩があるが、それ以外にとくに思うことはない。

聞くところによると歴代最強の三代目に匹敵する強さをもつ忍び

だったらしいが、あいにくおれは生前の彼に会ったことがない。

なにやら里の人々から多大な支持を得ているらしいが、残念なことにキュウコンのおかげで息子には反映されていない。

以上の理由から、おれは親父を継いで火影を目指す熱血主人公になる理由がないのだ。

「…つたく。まあ知らねえつてのは仕方ねえが。ちったア関心もて。元、国のトップだぞ？里の外壁に顔岩だつてドカーンとあんだろ？見守ってもらつてるとか、ポジティブに考えてみる。」

「あの制度ほんとにやめませんか？父親がドカーンと彫られてるの普通に恥ずかしいんですが。」

自分の父親の顔岩（笑）が国のシンボルなのは息子としてはなんとも言い難い恥ずかしさがある。

それに、あの岩に特に意味はない。忍びの国にあるのだから、ギミックの一つでもつけたらどうだ。

目からビームが出るとか。嘘をついた罪人の手を喰いちぎるとか。候補は数多くある。

それにしても、おれを仲間はずれにする里の大人達は、あれだけ目に付く場所に里を守った英雄の顔があつて、よくその息子に平然と暴力を振るえたものと常々思う。

彼らの脳の構造は一体どうなっているのか。おれは彼らの脳構造の事を密かに「木の葉のパンドラボックス」と名付けている。

きっと蓋を開けたらこの世の一番恐ろしいものが入っているに違いない。

普通の感性をもって生まれてきた幸福な人間ならば理解できると

思うが、彼らの悪行は英雄が見てる前でとてもできることではないはずだ。

しかしどうにも木の葉の民というものは恩義という概念を持ち合わせていないらしく、喜んでおれをストレスのはけ口に指名してくる。

これだけ指名されれば、ホストクラブなら不動のナンバーワンになれるほどだ。

奴らは常軌を逸した蛮族である。滅びても良かったのではないだろうか。

きつと九尾の事件はノアの方舟のような意味があったに違いない。蛮族を淘汰し、心優しい人々だけを生き残らせるという神の御技である。

とはいえ、おせっかいな我が親父様が天の意思をねじ曲げてくれたおかげで、おれはこうして忍界において最も強い、尾獣という力をもって生まれてくれたわけだが。

なるほど。そういえば親父には九尾の力を与えてくれたという恩もあったか。メモしておこう。

だがしかし、せめてあの岩に可愛い息子をいじめたやつの手を噛みちぎるくらいの能力はあっても良かった。多分、土遁で可能だろう。

「まあ、それとおまえがハブられてんのは流石に今更だろ。良かったじゃん。おかげで三代目の弟子になれたんだよ？俺なら嬉しくてブレイクダンスするね。三代目火の意思ファイアソウルブラザーズだね。」

「通りでおれはいつも熱い視線を頂いているわけですか。火の意思って尊いですね。」

「皮肉はやめろ。九尾を恐れることしか出来ねえカス共がかわいそうだろ。」

奇遇である。おれも同意見だ。

霧隠れの里では、人柱力でありながら民に慕われ続けた青年が長となり、以後、明らかに他里に比べて強力な忍びを輩出し続けているらしい。

霧が木の葉の忍びを軟弱者呼ばわりする理由の一つには、この辺りも含まれるのではないだろうか。

「まあお前も思うことは色々あんだろうが、お前に忍術を教えてくださいました三代目の事もちったア考えてやれ。あの人、ダンゾウさんにかかわられてこっそりマジ泣きしてたんだかな。」

だめだ。彼らの喧嘩は介入したら負けだ。

ふと顔を上げると、シツクな壁に取り付けられた古めかしい時計が目に入る。その針は既に夜九時を示していた。

イルカ先生も時の超過に気づいたようで、なにやら慌てた様子だ。おそらく、デザート注文するのだろう。

彼はいつもシメにスイーツを頼む。それも、やけに専門的なものなのだ。

しかし、未だかつて出てこなかったものはない。

おれは密かにこの店の限界を見極めることを楽しみにしている。さて、今日のお題は。

「おし、そろそろ時間だ。シメになんかデザート頼むか。大将！チョコレートフォンデュ二人前！苦めで頼む！あるよな？」

まさか。ここはラーメン屋だぞ？そんなキュートでシヤングリラなスイーツがあるわけ

「あるよ。」

「あるんだ…」

「みたいですね…」

木の葉の七不思議の一つである。

冗談半分で頼まれたチョコフォンデュを食すのに三十分ほど費やし、いよいよ帰宅の時間。

幸せな時間はあっという間に終わってしまう。

さらばラーメン。また来るよ。

「うし、じゃ、帰っぞ。今日はおれの奢りだ!」

「ええ。今日もあなたの奢りですね。ごちそうさまでした。」

「ウゼエ。」

まああれだ。少々過大評価が過ぎるとは言えど、九尾や里のしがらみに関係なく、自分の実力を認めてくれる人とこんな時間を過ごすのは嫌いじゃない。

おれの秘密を生徒達に話していないのも非常に好感が持てる。

口煩くは言っても、生徒の自主性を軽んずる真似はしたくないと、以前語っていた事を思い出す。

教師の鑑である。

それに、何と言っても毎度毎度飯を食わせて貰えるのはありがたい。

貧乏暮らしのおれにとって、食費が浮くのは最も喜ぶべきことだ。しかし、先生は説得もかねておれを飯に誘ってくれるわけだが、ここに来る度におれは人に施しを受ける喜びを思い出すため、逆効果ではないだろうか。

もちろん、口には出すことはない。

ラーメンは無料で食べるのが一番美味しいのだ。

「ではイルカ先生。また明日。」

「おう。じゃあな。いい夢見ろよ！」

イルカ先生と別れたおれは、アカデミーに宿泊設備をつけてもらうか、などと考えながら、今日もオンボロアパートに帰っていくのであった。

その日はラーメンで出来た船でラーメンの海を渡り、ラーメンの島を見つけるといふ楽しい夢を見ました。

続きます。

第三話 早くも崩れかけ？おれの仮面は鋼で出来てるんだぞっ！

「ごきげんよう。ナルトだ。」

今日も楽しくアカデミー活動！やりすぎない程度に落ちこぼれま

す。さて、今日の授業は手裏剣術と格闘術。

気合い入れて行きますか！

「「「きゃー！サスケくんすごーーい！！」」」

この耳障りな歓声はアカデミーの女生徒達が発する一種の忍術だ。広範囲攻撃で鼓膜を揺さぶる。

耳を塞いでなければ、そこに転がってるデブのように痙攣することになる。

哀れ秋道チヨウジ。当話における君の出番はここで終わりだ。

なかなか侮れない術だが、忍ぶ気があるとは思えないので戦場では役に立たないだろう。おれへの効き目はどうか？もちろん、取るに足らない。

そこまで考えると、おれはそつと耳から指を抜いた。

「…フン。耳障りなカス共め。どうして中心に手裏剣を当てるだけで賞賛できる？これくらいは忍びの基本中の基本だし、できない奴は忍びを目指す資格すらない。それと、確かにおれは他人と比べて整った造形をしているが、おれを見るなら顔ではなく動きを見ろ。貴様らレベルの雑魚にはいい教科書になる。」

先ほどまで賞賛を受けていた男。名をうちはサスケという。アカデミーでは授業でこの男が実力を発揮する度に先ほどの術が発動される。

いわばこの男がトリガーだ。

しかしこの男、かなりの実力者である。

おれの目測ではおそらくおれと同等クラス。三年間アカデミーにいたが、ここまでの逸材を見るのは初めてだ。

去年の怪物、日向ネジやテンテンが可愛く見えるレベルである。

三代目の教えをもつてしても、この男を完封できる自信は微塵もない。

天才。その言葉が最もふさわしい忍びのタマゴである。

だが先ほどの言葉からわかるように、性格にやや難がある。

幼少期より他人に負けたことがないであろうこの男は、いつしか自分こそが世界の中心だと思うようになってしまった。

今では目が痛くもないのに片目に眼帯をし、全身を漆黒のコートで覆っている。

インナーはボタンを三つほど外したワインレッドのシャツ。胸元には髑髏を象ったネックレス。

もちろんコートにはファーもついている。

中二病。それが彼の病名であった。

「「「きゃー！ー！ー！！もつと罵ってー！ー！」」」

再び術が発動する。痙攣していたデブは泡を吹いて保健室に運ばれていった。

良かったじゃないか。出番があつて。

だが侮れないのはサスケに限らず。

ここの女子生徒らもかなりの逸材が揃っている。俺様系中二病のサスケくんに対応すべく、なんとMという特殊な性癖に目覚めたのだ。(M：マゾヒストの略称。マゾとも略される。身体的、精神的苦

痛を快感に感じる特殊性癖。主にサディストとつがいになる。)

サスケは彼女らに才能のないゴミだと言うが、おれはそうは思わない。

マゾは忍びにとつて一つの才能である。なんせ敵の拷問を快楽に変換することで、味方の情報を決して漏らさない。

むしろその様子に引いた敵が、捕虜を解放する場合もあるってイビキさんは言ってた。

今年の学年は粒ぞろいであり、冷や汗をかくばかりである。

「フン。豚が。」

「「「はうっ。。」」」

問題があるとすれば、この少年誌にあるまじき姿くらいであろう。そこまで考えると、おれはもっていた手裏剣を何食わぬ顔で的から3mほど離れた横の木に叩きつけた。もちろん、悔しそうな顔と悪態をつくのも忘れずに。

「クソツ！また外れた！」

イルカ先生はおれをゴミを見る目で見ていた。

「やはり世界には張合いがない。生まれながらに手にした玉座になんの意味があるだろうか。俺様は退屈だ。どこかにこの俺様を楽しませてくれる存在はいないものか。なあ、孤狼の戦士ナルトよ。」

「ちよつと話しかけないで貰えませんかね。黒が感染するんで。」

さて。これが最も危険な問題だが、この少年、うちはサスケは何故だか頻繁におれに話しかけてくるのである。

きっかけは些細なものだった。いつものようにおれが影口を叩かれていたところ

にサスケが通りかかったのだ。

慣れているため華麗なスルーを決め続けるおれを見て、どういうわけかサスケさんは「周囲を歯牙にもかけない孤高の戦士」だと勘違いしてしまったのだ。

それから同士認定されたおれは、こうして彼に絡まれる日々が続いている。

正直目立つからやめて欲しい。

その上、奴はおれに「孤狼の戦士」などという二つ名をつけやがった。

この恥ずかしい二つ名を会話の度に呼ばれるおれの気持ちかわかるか？今にも気が狂いそうだ。

おそらく周囲の生徒達からは、このおれもサスケと同様の頭のおかしい奴だと思われているに違いない。

ちなみに、「孤狼の戦士」と書いて、「ヴォルフクリーガー」と読む。

初めて呼ばれた時は失神するかと思った。

余談ではあるが、彼は自身の事を「漆黒の墮天使^{ルシフェルオブカオス}」と呼ぶことを薦めてくることがある。

無論、それだけは絶対に許していない。

どうすればヴォルフなんとかを取り消してくれるだろうか。これまでの説明で、金品や甘味で手を打ってくれるほど甘い敵ではないことをわかって貰えると嬉しい限りである。

「だがなナルトよ。貴様の先ほどの姿はいかがなものか？いくら脳ある鷹は爪を隠すとはいえ、手裏剣を的に当てないのは少々やりすぎだろう。しつかりしろ。孤狼の戦士。」

「当てないんじゃないんですよ。三留なめんな。」

「そんなはずはあるまい。俺様の目は貴様を注意すべき特異点だと告げているぞ：クツ！右目がツ！やはりな。貴様には秘められた実力がある。俺様の邪眼は嘘をつかないツ！この、封印されし暗黒の邪眼がなツ!!」

「邪眼とやらだつて封印されたら拗ねるだろ。嘘くらい広い心で許してやれないでどうするんだ。」

すかさず右目に左手を当てる中二病御達のポーズ。右目が痛いのだろうか。イブクイックなら常備してあるので必要とあらばいつでも言つて欲しい。

それに彼の右目に宿っているのは邪眼ではなく写輪眼だ。うちの写輪眼は、まごうこと無き木の葉最強の血経限界である。

高い幻術耐性や印からの術特定、チャクラの可視化。それになんと言つても固有の絶義。高い汎用性と圧倒的攻撃力を併せ持つチート能力。それが写輪眼だ。

どこぞの最強気取りの白目剥いた一族よりよほど恐ろしい瞳術である。

それをこの年で開眼していることもまた、彼が天才たる所以であろう。奴がおれの本来の力をチャクラの流れから看破し、真なる同志におれの名を連ねるのはもはや時間の問題だ。

そうなつてしまつたらおれの夢と希望のニート生活は終わり、特に恩もないどころか恨んでしかるべきクソゴミ隠れ里のために粉骨砕身する社畜ライフが始まつてしまう。

さて、どう処理すべきか。

誰か話を通じない系の天才の対処法つてご存知ないだろうか。

あ、おれ友達いないんだつた。

「おつといかん！昼餉の時間だ！失礼するっ！」

なんだコイツ。ほんと頭おかしい。

誰かこいつの攻略本持ってきてくれ。100000円払うから。

昼休憩が終わって午後。

昼飯？おれはもちろん給食を食べた。

今日の献立は無料ハンバーグカレーライスと無料フルーツポンチ。それにいつもの無料牛乳だ。

大変、美味であった。

さて、腹が膨れたところで、やってくるのは次の授業、忍び組手の時間である。何を隠そう、この授業はあまり得意ではない。

おれにとって下忍にすら満たないモブカスアカデミー生など赤子と同等。倒すことなど昨日の朝飯前。

わざと負けることに神経を使わなければならないレベルだ。

しかしここでのおれは三回留年の落ちこぼれ。下手に勝ったりすればもれなく噂が広がってしまう。

それが火影の耳に入ってみろ。ついにやる気になったかと両手を挙げて喜ぶ師匠の姿が目に見えぬ。

だからこそおれは、より自然により弱く見えるように配慮しながら負ける必要がある。調整の難しきことこの上ない。

「おつし、お前ら！組手の時間だ！取り敢えず、二人組作れ！」

イルカ先生の号令が響く。

取り敢えず二人組を作れ。

皆さんご存知ボツチ殺しの呪文であるが、あいにくおれには効かない。

この学校にも例に漏れず、おれをよく思わない連中はごまんというためだ。

そんなおれを公式の場でサンドバッグの如く叩きのめすことが出来る組手の時間は、彼らにとって都合のいい自慰行為の時間だ。

頼んでもいないのに、毎度毎度、たくさんのファンの方がおれの前に駆け寄ってくれる。

ほら、今回もやってきた。

今日の一番乗りは君か。青髪短髪くん。名前は知らない。

確かくの一クラスに好きな子がいるんだとか。クラスで話してたのが聞こえてきたのを覚えている

おれを倒してかつこいいところを見せたいらしい。

「へへっ、ナルト！組もうぜ！」

「よろしくお願いします。」

先程からチラチラと送っている視線からして、どうやらお相手は春野サクラのようだ。

悪い事は言わない。やめておけ。

彼女は一月に5人以上からは必ず告白されるモテくの一だぞ。それも、その全てを切り捨てるキリスト教徒だ。

貴様の如きモブ、その屍に名を連ねるだけなのはわかっているだろう？

しかし、あいにく今のおれは落ちこぼれだ。

一人の少年の純情が散っていくことを止めることもできない。

哀れ青髪。おれはお前に気持ちよく負けるためだけに頑張るよ。そして斬られて来てください。

「全員ペアは組み終わったな？では…始めツ!!」

イルカ先生の号令が響く。

「シッ!!!」

と同時に何やら気合の入った声を出しながらこっちに走ってくる青髪。速度はとても遅い。

そして棒立ちになっているおれめがけて、側転からの回し蹴りを繰り出してきた。もちろん、キメ顔。

「うわっ!」

おれはすかさず手を前で組んでガード。その際、仰向けに転けるのも忘れない。ここ、弱そうに見えるポイントだぞ。

「よしっ!!」

青髪はそのままおれの上に馬乗りになり、おれを地面に固定する。

そして、無防備になったおれの顎に掌底を繰り出した。もちろん、春野サクラへのアピールも欠かさず。

うわっキモツ。こいつ今ウインクしただろ。

「うがっ?!」

ここでおれが気絶した振りをして、試合終了だ。

いかにも弱そうな悲鳴も大事だぞ。相手にまるで自らが主人公になったかのような優越感を与えるからな。

「せんせーい!もう終わりましたー!」

「何っ!?!…ってナルトか…。」

イルカ先生がまるで潰れたゴキブリを見るような目でこっちを見てくる。

「ホントもう……いつ弱すぎて話にならねーよ!! まあ、技を試す相手としては一級品だけどなあ! ハッハッハ!」

クスクスと笑いがおこる。

まあ、いつもの事だ。おれが失敗する度、周囲では笑いがおこる。ペットショップで子犬が人に吠えているような非常に微笑ましい光景であり、個人的には気に入っている。

弱いヤツは下を見て安心し、レベルを上げようとしなない。

だから、弱いヤツは弱いまま。卒業しても、下忍になれず、アカデミーに強制送還だ。

もしかしたらおれは、弱者を忍びの世界に排出しないという意味で、里に貢献してるのではないだろうか。

そんな事を考えながら、そろそろ本格的に気絶（昼寝）するか、と思ひ、薄らと開けていた瞼を閉じようとしたところで。

おれは、とんでもない言葉を耳にすることになったのである。

「先生。うずまき君は気絶していません。」

…はっ? 何を言ってるんだこの女は?

おれは薄目で、その言葉を発した女、春野サクラを睨みつける。

「…どういう事だ? サクラ。」

おい、イルカ先生。頼むからニヤニヤしないで下さい。
あつ、吹き出した。

「何がおかしい…いえ、失礼しました。私は医療忍者を志しており、人体について、未熟ながらも知識を有しています。先程の彼の反応は気絶した人間のものではありませんでした。」

「お、おう、そうか。続けろ。」

「何やら青芝君が私の方をチラチラ見てきたので怪しいと思い、観察していました。どうやら彼は私に好意をもっており、格好をつけたかったものだと考えられます。」

…いや。それは。ここで言う事ではないだろう。

青芝君を見たまえ。顔が真っ赤だ。

青芝君なんだぞ。これでは赤しry

「もちろん彼と交際することは不可能ですが、余りにもうずまき君があつさり倒され、それに気絶もしていないため、これは青芝君が私にアピールするためうずまき君と事前に打ち合わせ、今回の茶番を決行するに至ったのだと考えました。」

もうやめてあげて下さい。青芝君、男泣きしてるじゃないですか。顔色だって、みるみるうちに真っ青に変わってしまった。名前通りに。

「いくら想い人にもいい格好を見せたいからと言って、己の力を研鑽すべき授業の中で不正行為を行うのは忍びの心得に相応しくないと考え、こうして進言させていただきました。うずまき君。起きなさい。何か申開きはありますか。」

…まずいまずいまずい！

考える。どうすればいい？

勿論、おれは先程あつけなく散った少年と共謀している訳ではない。

かと言って、それを話せばおれが手を抜いていた事がバレてしまう。

これは、詰んだか？

クソツ、意外な伏兵がいたものだ。

うちはサスケばかりに気を張っていたおれの失態か。

いや、待て！まだ方法はある。

おれが事前に彼の気持ちに気づいていて、勝手にそれを手伝った事にすれば…

いや、それでは説得力が薄い。おれにメリットがないからだ。

その上、おれの精神が高度に熟成している事がバレてしまう恐れがある。

それでは本末転倒だ。

ならばこれならどうだ？

おれも彼女の事を好きで、ライバルを蹴落とすために、あえてわかりやすい演技をして…

いや、何がしたいんだおれは！

イルカ先生のニヤニヤが凄いな。諦めろ。そう目が語っている。

くそお、まさか本当に終わりなのか…

いや、まだだ！チャクラで無理やり血液の流れを止めて一時的に心
肺を停止させれば…

「フハハッ！我が同土孤狼の戦士がそんな姑息な真似をするはずがな
いだろう！ただ、奴は力を隠していた！それだけに過ぎん！」

…ここでサスケさんだとお!!

それだけはやっちゃダメだ！反則だ！横暴だ！

やつの目はチャクラの流れを見ることが出来る。おれが術を使え
ば一発でバレてしまう！

どうする？うずまきナルト。

お前のニート生活へのこだわりはその程度か？

いや、しかし。この状況を切り抜ける手段は一体…

「うるさいっ!!」

!?

「さつきから聞いてたらなんだ！俺がナルトに手を抜いて貰っただあ
？そんなわけねえだろうが!!」

あ、青芝—————!!!

「いいか！ナルトは一番弱えんだ!!そんなの、皆が一番わかってるは
ずだろ！気絶してないだア？そんなわけねえ！」

おまえ！神か！

いいぞ！もつとやれ！

「だけど青芝君。私が確認した時彼は…」

「一瞬気が飛んでたんじゃダメなのか？」

「一瞬？」

「サクラさんが見た時！確かに奴は気絶してなかったのかもしれない！でも一瞬でも気を失っていれば俺の勝ちに変わりはないねえ！多分、今は目が覚めたもののどうしていいかわからないから寝たふりしてるんだろ！なあ！ナルト！」

「ここだっ!!」

「…そうなんですよ。気がついたら周りが騒がしくなってる。おれどうしていいかわからなくなってる…」

「なあ！言つたらろ！こいつは雑魚なんだ！わかったこと疑ってんじやねえぞ！」

青芝君。

君はおれをバカにするつもりで言っているのだろうが、それが全部おれにとってプラスになっている事にお気づきだろうか。

君には感謝してもしきれない。今度一緒にラーメンでもどうだ。嫌か。

「それをサクラさんは変に勘違いして…それにみんなの前で俺を振って…あろう事か俺のことをバカにしゃがって…」

…ん？　ん？

何やら雲行きが怪しくなってきたようだぞ？

「絶対許さねえ！このクソ女があああ！」

あ。

青芝君はそう叫ぶと、拳を構え、春野サクラめがけて全力でダツシュしていった。速度はとても遅い。

「もう見てられるか！シカマルっ！」

「御意。」

青芝君の様子を見かねたのか、くのークラスの、いやアカデミーの番長こと山中いのが命令をとばす。

すると、あつという間に配下の奈良シカマルの手によって、彼は取り押さえられた。

「離せえ！このっ……！」

「御免。」

そして、首の裏をトン、とされて、意識を刈り取られた。

よくやった。青芝君。君の出番はここまでだ。ゆっくりお休み。

「女を殴ろうとするたア、なんて奴だ！男の風上にもおけねえな！」

「そうだそうだ！いのさんのゆうとおりだ！」

ちなみに、一つ前のセリフはチョウジ君のものです。悪しからず。

「でもなサクラ。人の気持ちを考えなかったアンタにも非はあるってこと、忘れるなよ。」

「…ええ。山中さん。気をつけるわ。」

「じゃあ解散だ！まだ授業中だろ！組手すつぞ！な、イルカ！」

「そうだな。お前ら散った散った！はい、組手始めるぞー。後、ナルトは少し話があるからおれんどこ来い。じゃ！始め！」

さて、今日のピンチは勇気ある少年のおかげでなんとかうやむやにすることができたわけだが。

今回の騒動の教訓として。春野サクラに気をつけることを、肝に命じて置く必要があるそうだ。

あの後？イルカ先生にめちやくちや説教されました。ラーメン無しで。

おれは今、とても悲しい気持ちだ。

ボロアパートにてコンビニで買ったパンをぼそぼそ食しながら、おれは一人途方に暮れるのであった。

第四話

【悲報】寝て起きたら指名手配されてた

こんにちは。うずまきさん家のナルトです。一人暮らしです。

そろそろ、卒業試験が近づいてきた。

生徒の皆さんはいつもより真剣に忍術の勉強に励んでいる様子だ。

今年の課題は去年までの統計から考察するに：分身の術だろう。

教員らは基礎が固まっているかどうかを確認する傾向が強く、卒業試験ではあえて単純な術を課すことが多い。

中でも分身は基本的な術だし、落ちる者は少数だろう。

むしろ、おれ以外の全員が合格する事も考えられる。

もちろん、おれはその程度の初歩の術、とつくの昔に習得している。

得意忍術は何だと聞かれれば、師匠に教わった多重影分身だと言いたい張れる程だ。

しかし、仮にも忍術過程を修めた証明と言うべき卒業試験の課題が、たかだか分身の術というのはいかがなものか。

これは入学して一月程で習得する者がちらほら出てくる程の初等中の初等忍術であり、出来ない方が不自然である。

サスケなんて、入学式の中で高笑いしながら分身してた。おれはその様子を今でも良く覚えていてる。

ものは相談だが、来年から性質変化のテストにするのはどうだろうか。

自分でも何を言っているのかわからないとは思いますが、言わせて欲しい。手を抜く側の事も考えてくれ。

失敗が難しいのだ、この術は。

この期間中、何としても、よりカッコ悪く、かつ自然に失敗できる分身の術を模索する必要がある。

もし試験官がイルカ先生だけならば、演技など切れたゴムレベルに役に立たないが、卒業試験は教師が三人ほど出張ることとなっている。

これは、可能性を捨てるべきではない。残り二人がおれを失格にすれば、多数決で自然とおれの落第が決定される。前代未聞の4回落ちの誕生だ。

つまりはイルカ先生以外を騙すことができれば、ゲームクリア。

もう一年、遊べるドンである。

さて。時が経つのは早いもので。光陰矢の如しとはよく言ったもので。

木の葉の桜が満開になる今日このごろ。木の葉忍者アカデミーは卒業試験の日を迎えた。

コンディションは悪くない。天気もいい。

後は、己の努力に従うのみ。結果は後からついてくる。

如何にうまく試験監督に「こいつダメだ。」と思わせるかが勝負の鍵だ。

漢うずまきナルト、13歳。一世一代の大舞台である。

所変わって試験室前。試験室は普段授業に使っている教室と同じである。これは、生徒達に普段通りのパフォーマンスをしてもらうための措置らしい。

部屋から飛び出して来る子供たちは、誰もが喜色いっぱい表情を浮かべている。中には小躍りしている者、スキップしている者もいる

くらいだ。

見たところ、落ちた者は居なそうだ。

この様子だと、ここで合格した八割以上が下忍にすらなれず、アカデミーに送り返される事を、彼らはまだ知らないのだろう。

火影の爺さんが口を滑らせた話によると、アカデミー卒業試験はあくまでアカデミー卒業試験に過ぎず、下忍として認められる為の試験は別に用意されているらしい。(だとしても分身の術は酷い。)

この辺を子供たちに伝えてやらないのは何とも忍びが治める隠れ里らしい風習であるが、親類にアカデミーの運営に携わる者がいる場合、自身の血縁者にこっそり教えてしまう恐れがある事を上層部の皆様はどうお考えだろうか。

もちろん忍びたるもの血のつながった子供だろうと甘やかす事は無いと思うが、忍者になるための重要な情報を先に入手する事ができる環境と、できない環境が家庭によって分けられるのは納得が行かないところ。

と、このように文句を言ってみたとところで事実が変わる訳でも無い。

この喜ぶ生徒たちの大半が、来年もおれと一緒に素晴らしきアカデミー生活を送ることになる事は決定事項であり、おれはそれについて何も思うことは無い。

どんまいの一言に尽きる。

あ。春野サクラが出てきた。ニコリともしていない。彼女は要注意人物であるため、是非とも下忍になって欲しい。

「うずまきナルトッ！入れっ！」

いよいよおれの出番だ。

さて、今年も派手に失敗して、先生方の酒の肴にでもなつてあげよう。腕がなるはこの事か。おれは今、この一年間の中で最もやる気

に満ち溢れている自信があった。

「ナルトくん。今年の試験は分身の術だ。早速だけど、使ってみてくれないかな。」

彼はミズキ。おれの一つ前の担任で、くの一から絶大な人気を誇る男前教師だ。二年ほどおれと接してきて、演技を見抜くどころか疑うことすらしなかった、とても優しい先生である。

「ふん。いくら落ちこぼれの貴様でも、これくらいの下級忍術位は習得しているだろう。ああ、急げ急げ！貴様如きに時間を使わせるな!! 時間は有限なのだからな！さあ、さっさと始めんか!!」

彼は権田原ゴンザレス。今後登場する予定は無い。

「わかってんな？ナルト。」

そしてお馴染みイルカ先生。試験監督はこの三名のようだ。何やらイルカ先生がガンを飛ばしてくるが、おれは気づかない振りをして冷や汗を流す。

この冷や汗は水遁の応用で、自信の無いこと、焦っていること、恐怖を感じていることを相手に言葉を使わずして伝えられるという、非常に汎用性の高い術だ。

おれはこの術を主に小物臭を出すために使用している。

なお、オリジナルの術であるが、勿論特許は申請していない。

「では、始めます。」

さあ、ショータイムだ。

結果として、おれは今年も見事に落第を勝ち取った。ギリギリの戦いであった。

おれの開発した新術、名付けて「スライム分身の術」は、通常の水分身の術に必要なチャクラをあえて削ってコントロールに割く事で、分身体の輪郭をぐにやぐにやにする高等術だ。調整が非常に難しく、少々九喇嘛にチャクラを借りた。

この術は、教師陣に「チャクラを上手く練ることができない」という印象を与えつつ、高等忍術の無駄使いといった観点からイルカ先生を呆然とさせ、発言を許さないという二重の効力をもつ。

おれの日論見は見事的中し、イルカ先生に喋らせないまま、無事試験を落ちる事に成功したのであった。

試験が終わった後のイルカ先生の顔は凄かった。まるで時間が止まったかのような表情。タイムスリップして白亜紀に来た人の様な表情であった。

おそらく近日中に説教も兼ねてラーメンに呼ばれるだろうから、その時に笑ってやろうと思う。

そんな事を考えながら公園のブランコを浅く漕ぎ、気持ちのいいそよ風と達成感を感じていると、女性と子供の話し声が聞こえてきた。

どうやら下を向いているおれを見て一人だけ試験に落ちた事を落ち込んでいるものだと勘違いし、わざわざ陰口を言いに来てくれたらしい。

せつかく来てくれたのだからお茶くらいは出してあげたいものだが、あいにくこの公園にはウォーターサーバーすらついておらず、出せるものと言えば砂場で作った団子位である。

「まあ、例の子よ。ほら、化けギツネの。」

「またあの子だけ卒業試験落ちたんですってね。これで何回目よ。」

「ママー、そんな事より、僕合格したよー！今日のご飯何ー？」

「オレもオレも！」

「うふふ、今日はあなたの大好きなハンバーグにしましょうか。」

「本当？わーい!!」

ここぞとばかりに合格した自分の息子を見せつけ、おれに悲しい思いをさせたいという意図は十分に理解できるが、それなら化けギツネのくだりは蛇足であろう。おれに九尾が封印されていることについては、確か箝口令がしかれているはずだ。

子が親の真似をして育つのはこの世の真理である。

親が里の箝口令を堂々と無視するのを見て育った子供が、将来、何も考えずに里の秘密を口にし、それを偶然居合わせた他里の忍びに聞かれ、いいように利用されないとすら限らない。

忍びの親なら先を見据えた子育てをするべきだ。ハンバーグの前に、忍び社会で生きていく人間としての良識をこさえてくれたら幸いである。

しかし、家族か。家族との絆とは無縁の生活を送ってきたためか、

おれはその辺の常識に疎い。

何事も経験だ。今度親父の顔岩にでも落書きしてやろうか。少しは親近感が湧くだろう。

何を言ってるんだ。勿論、冗談だ。

おや？後ろから誰かが近づいて来る気配がする。一瞬身構えるが、気の質からして、実力者ではなさそうだ。

ふつと警戒を解き、自然体に戻ったところで、気配の主が話しかけてきた。

「ナルト君。また試験に落ちちゃったね。大丈夫？」

とても優しい、ミズキ先生である。

「はい、大丈夫です。できないものは仕方ありませんから。」

「そうは言っても君は過去に三回も試験に落ちてるんだ。そろそろ合格を上げてもいいと思ってたのに：権田原先生が強情でね。ごめん。」

「いえ、自分の事ですから。」

このイケメン教師、今日はやけにおれに絡んでくる。普段は腫れ物を触るように扱うというのに。薬でも服用して来たのだろうか。

具体的にはベンゾジアゼピン系抗不安薬等が考えられる。これは精神安定剤の一種で、短時間のみ作用する効果を持つ。

「そんな君にチャンスを与えたいと思ってるね。」

ん？

なんで？ いらないますけど。

「火影様の部屋には、強力な余り一般人の閲覧が禁じられている、秘伝の巻き物があるんだ。その術を覚えれば、きつと権田原先生やうみの先生も、君のことを認めてくれると思うんだけど…：どうかな？」

知ってる。修行の時使用した巻き物だからな。大事そうにしてたから、わざと出前で頼んだキーマカレーこぼしたつけ。

あの時は酷く怒られた。まだおれもガキで、分別がついていない頃の話だ。非常に懐かしい。

たしか、七歳くらいの頃か？

しかしこの男。非常に怪しい。木の葉の秘伝の巻き物をとってくるよう誘導するなど、普通ならまずありえない。何か裏があるのはまづ間違いないだろう。

おそらくは他里との癒着。金に目がくらんだか。

ぶつちやけると、木の葉の里が危険に晒されようが里の機密がばらまかれようがおれとしては願ったり叶ったりなので見過ごしたい所ではあるが、大恩ある火影の爺さんの困った顔は見たくない。

彼が困った顔を見せるのは、弟子に説教をする時だけで十分だ。

ここは作戦に踊らされた振りをして、普通にチクリに行こう。

「そんなものが…きつと凄い術がたくさん書かれてあるんでしょね。おれ、絶対巻き物取って来ます!!」

「その意気だ！ ナルト君！」

子供を舐めたことを後悔するんだな、ミズキ。お前は終わりだ。その涼しい顔が負け犬の様に歪んでいく様を、おれは遠くで楽しむむしよう。鏡の前で吠え面をかく練習をして待っているといい。

その日の夜。暗部によって霧隠れの里の忍び二名が摘発された。作戦決行の前夜祭のつもりか、二人は居酒屋に立ち寄り、二時間の飲み放題食べ放題コースを注文した。100分ほど経過した頃、ペロペロに酔って作戦の全てを自慢げに、それも大声で話す二人を見て、怪しんだ女将が通報。ラストオーダーを頼むことなくそのまま捕縛された。

目撃者の証言によると、彼らは木の葉の中忍、ミズキと結託し、木の葉に伝わる秘伝の巻き物を盗んで逃走する心算だったらしい。

計画によれば、ミズキはそのまま里を抜け、霧隠れに好待遇で招かれることになっていたそうだ。

全て、朝刊に書いてあった事である。

ミズキの作戦は日の目を見る前に、協力者二名のうっかりによってあっさりと幕を閉じた。

今頃、ミズキは頭を抱えている事だろう。

そろそろ追っ手も動き出す頃合。こうなってしまうえば、捕まるのも時間の問題だ。

自分の手でミズキの反逆を暴き、里に借りを作ることが適わなくなったことについてはいささか残念な気持ちではあるが、終わったこととは仕方が無い。

それよりも、次の一年間もアカデミーで悠々自適に過ごせることを、今は素直に喜びたいと思う。

朝刊を一旦机の上に置き、パンと牛乳を取り出して席に付き…危うく牛乳をこぼしそうになった。

『秘伝巻物流出未遂事件　主犯　ミズキ　共犯者　うずまきナルト　見かけた者は本部まで連絡お願いします。』

は？なんだこれ。

寝て起きたら、ミズキ先生の共犯者の容疑をかけられて指名手配されていました。

第五話 お前の罪を数えてやる！一個!!

前回のあらすじ。

ミズキ先生を嵌めてやろうと計画に従った振りをしたものの、その日のうちに火影の爺さんの所へ行くのはあまりに面倒くさかったため、次の日の朝一で報告しに行こうと思っていたナルト。

甘かった。おれは甘さチヨコラテを置き忘れていたようだ。

昨日のおれとミズキのやり取りを見ていた者が居たらしく、すっかり共犯者にされてしまっている。

誰だ？あのハンバーグ親子だったら決して許さない。牛のゾンビに変化して夢枕にたつてやる。幻術の応用で可能だっ！

いや、誰が密告者であるか。そんな事はどうだっていい。今はこの状況を何とかする方が先決だ。

おれは今容疑者として里の忍び共に追われている。今の時刻は朝の六時だ。既に搜索が始まっていても不思議ではない。

まだこの家に追っ手が伸びていないということは、アカデミーでも有名な落ちこぼれであるおれを御しやすい相手だと判断し、一応は中忍のミズキを優先している為であろう。

とはいえ気まぐれな忍びがいつ此処に現れるかもわからない。

まずはこの家を離れる必要がありそうだ。

おれは食べかけの朝飯をしっかりと胃に入れ、火影直伝の素早い歩法で木の葉の街に繰り出した。

さて、街に着いたは良いものの、忍びの数が多すぎる。それも上忍

が半数を占めている。見つければまず、逃げる事は不可能だろう。

幸いなのは、皆ミズキだけを血眼になって探しており、まだおれの搜索に意識が向いていない事か。

白眼を使えば直ぐ見つかるだろうに、搜索隊に彼らの姿はない。例の最強一族は朝が弱いと見て間違いないだろう。

火影の邸宅にさえ辿り着く事が出来れば、巻き物の術を会得しているおれがわざわざミズキの口車に乗るはずも無いと、火影様直々に証明してもらえるはず。

しかし、本件についての会議の本部が火影様のおわす木の葉総本部であるため、近づくことは非常に困難だ。

それにしても、師匠が裏も取らずにおれをよりもよって指名手配するとは考えづらい。

これは、相談役のボケ老人共に押し切られたと見て間違いないだろう。

水戸門ホムラとうたたねコハル。もしこの世界に老人ホームがあったなら、おれは迷わず彼らをご招待する自信がある。

あいつらは本当に性格が悪く、おれが猿飛ヒルゼンの弟子だと知ってから、よくこのような茶々を入れてくるのだ。

本当に、意味がわからない。

師匠はお茶目な老人らで結構などと仰っていたが、被害者からすればたまったものではない。

下手に里の上層部にいるので、彼らの悪ふざけは冗談では済まされないのだ。

暗部に拘束されかけたのも一度や二度では無い。金輪際やめて頂きたい。

今回の突然の指名手配も彼らが暇を持て余した故の戯れだろう。断じて許さない。

腹いせにこの件が片付いたら、彼らがいつも食べている煎餅の海苔

の部分で韓国海苔に替えといてやる。老体にはさぞかし油が応えるだろう。

さて、事の発端を考えるのはこれくらいにして。今回の打開策を練るとしようか。

まず、おれを追うであろう上忍達はプロだ。何処か一つの場所に隠れていては見つかる確率が高く、危険である。

街中を逃げ回るのも別の意味で危険だ。遮蔽物や高低差が多く一見逃げやすいように見えるが、おれが上忍相手に足掻く様を大勢の群衆に見られてしまうというデメリットがある。

かと言って、馬鹿の一つ覚えの様に里の外の森に出るのも頂けない。

戦争を経て、実戦経験の豊富な上忍に対して、戦場になることが多かったと推測される森で勝負をする事になる可能性がある以上、余りにも無謀だと言わざるを得ない。

仕方がないが、ここは定石に従うのがベストだと思う。

中忍程度の忍びを一人倒して、変化の術で成り代わってしまえばいい。

追われる側から追う側にジョブチェンジする事で情報アドを得られる上、おれは中忍レベルの術なら卒なくこなす事が出来るため、怪しまれるリスクも少なくて済む。

後は隙を見て火影に会いさえすれば、晴れておれの無実が証明される。

だが、今回欺くべき相手は上忍だ。敵が味方に变化している可能性は、暗黙の了解として各々の頭にあるだろう。

先ほどから観察しているが、彼らはミズキを探しながらもジェスチャーを用いた本人確認を行いつつ、互いの挙動や表情の動きへの注視を怠ってはいない。

変化対策の合図はもう覚えた。後は変化する相手である。

ターゲットに相応しい人物像は以下の通りだ。

おれが日頃から接する機会が多くクセをほぼ完璧に再現できる人間であり、かつおれの実力で瞬殺できる人間。

この二つの条件を満たす相手は、事件の主犯であるミズキを除けば後一人しかいない。

その人物は…っ！

吾輩の名は権田原ゴンザレス。アカデミーの講師をしている特別上忍だ。この妙な名前は親がノリでつけたらしい。はっはっ。笑えばいい。もう慣れた事だ。

自己紹介はこれくらいに。吾輩は今とても忙しいのだ。

なんとといっても、木の葉忍者アカデミー始まって以来の重大事件。

教師が生徒と共謀して犯罪を犯そうとしていたなど、清く正しい学舎にあつてはならない事だ。同僚に反逆の気配があつたことに気づけなかつた吾輩も、まだまだ青いな、と思い知らされた事件でもある。それに、犯人の片割れはあの出来損ないの化け狐。

せめて同じ屋根の下にいたよしみとして、吾輩の手で二人共葬つてやらねば☆

犯人を二人共吾輩の手で殺す事が出来れば、吾輩は一躍有名になれるだろう。

アカデミーの教頭にだってなれるかもしれない。あの英雄、うみのイルカを、顎で使えるようになるかもしれないのだ。

そんな希望を胸に、吾輩は肅清の為の第一歩を踏み出そうとして：

そのまま、意識が、暗転した。

おい、誰がゴンザレスだ。おれだ、ナルトだ。

作戦の第一段階はあっけなく成功した。

アカデミーの講師である権田原が一人になったところを狙って、一瞬で背後に回り込み、頸動脈を絞めて意識を刈り取った。なんとも呆気ないものであった。

同僚と生徒の不祥事を自らの手で解決し、称賛を受けるなどという、甘い甘いストーリーでも夢想していたのだろうか。こう言っただけだが、とても隙だらけだった。

彼はよくおれたちに「忍びたるもの常に戦場にいると思え」と語ってくれたが、その本人がこの体たらくでは説得力も何も無い。只只滑稽である。

今彼には自宅で眠ってもらっている。きつと起きる頃には何もかもが片付いているだろう。一言謝りたい。ごめんな。

では、作戦の最終段階に入りたいと思う。この姿のまま火影様のいる本部に向かい、事情を説明する。

おれはバネ髭をピン！と弾いて気合を入れ、本部までダッシュしようとしたその時。

「あれ、権田原じゃないか！ちようど良かった！搜索が難航しているね。一旦広場に集まろうって事になったんだ。さあ急ごう、時間が無い。ミズキはもう里の外に出ているかもしれないからね。」

「…あいわかった☆」

何とも不幸な事に名前も知らない同期っぽい忍びに見つかってしまい、広場に向かわねばならなくなってしまうた。

これではとんだ遠回りである。

だがしかし。作戦に妨害は付き物だ。その妨害を乗り越えて目的を達成してこそ、ようやく一人前の男子だと言える。

おれはあのイルカ先生の妨害を物ともせず、見事留年を勝ち取った真の男だ。この程度は何ともない。動揺すらしない。

ただ、この名も知らぬ忍びの服にひつつき虫(『バカ』と称される事もある)をつける程度の報復は許して欲しい。

この植物は繊維にくつつく性質があり、主に他人の服につけて馬鹿にするといういたずらに使用されるスグレモノだ。

おれは割と使う。

広場につくと、そこには十数人程度の忍びが集まっていた。話を聞くと、どうやら遂におれを探す気になったらしい。

「どのみちろくな奴じゃねーんだ！見つけしだい殺るぞ!!」

前言撤回。上忍たちは、おれを殺しに来るらしい。目を見ればわかる。奴らは本気だ。アマゾンの狩猟民族のような目をしていやがる。

確かにおれはどのみちろくな奴ではないし、里の機密を持ち出そうとした人間を抹殺するのはこの世界において当然の事だとは思うが。

まさか彼らも当の本人がこの場に居て、一緒になってナルトぶつ殺すぞ宣言をしているとは夢にも思うまい。

あと、なんとなくだが秋道チョウザさんだけは許してはならない気がする。

しかし、意外なことはまだミズキの野郎が捕まっていない事だ。どう考えたって不自然すぎる。彼の実力ではこれだけの時間逃げ回る事など不可能に等しいはずだ。

どういう事だ？まさか他に強力な協力者がいるのか？

…ゴホン。いや、冗談じゃなくて。

女生徒には好かれていたものの、彼は女をとつかえひつかえしていたらしいから、里内での評判はあまり良くなかったはず。友達だってさほど多くはなかったはずだ。

女生徒の家に転がり込んでいる可能性は？いや、流石に親が気づいて通報するだろう。

では元教え子を人質にとつて、匿ってもらっている可能性は考えられないか？これもありえない。少しでも騒ぎが起きれば、それを上忍が見落とす道理がないからだ。

となると、やはり協力者が？それとも運が良かっただけか？

あるいは、ヤケを起こして既に里を抜けた後か？

いや、ミズキがどこで何をしようがおれには関係の無いことだ。それよりも。早く火影様の元へ向かい、手配を取り下げてもらわねば。

なんせ時間が無い。秋道チョウザさんたちがどのみちろくな奴じやないおれの命を狙っているのだから。

おれは再びバネ髭をピン！と弾いて気合をいれ、息を大きく吸い込み、クラウチングスタートの構えを取ったところで。

「権田原さん。ちよつといいですか。」

何故か、綺麗な女の人に行く手を阻まれた。さつきもこんな事があつた気がする。

取り敢えずこの女の人のワンピースにも、ひつつき虫をつけておい

た。

綺麗な女の人は、権田原に変化したおれを里のはずれの森まで連れてきた。ずいぶんと早足だったが、何か急ぎの用事でもあるのだろう。

ちなみに、誠に不本意であるが、今のおれは一般的な感性を持つ男性として振舞わねばならないため、体内のチャクラを操作して無理矢理頬を染めている。

別に大人の女の人にデレデレしている訳では無い。そこは間違えないでいただきたい。

そもそもおれは、男を見て欲情したりしない。

先にタネ明かしをしておこう。この女はミズキである。

女性関係に定評のあるミズキらしい仮初の姿だ。その所作や体運びは、どこからどう見ても、女性にしか見えない。

声も完璧だ。里の上忍が騙される訳である。

だがしかし、おれの目は誤魔化せない。「綺麗な女を見たら美人局だと思え」とイルカ先生に教わってきたおれは、初対面の女性はまず疑ってかかることにしているのだ。

その教えの甲斐あって気づくことができた。この女、ミズキ先生と同じピアスをつけている。それも、左耳にだ。

確かこのピアスはオーダーメイド品で、世界に一つしか無いとか。よく彼が自慢げに話していたのを覚えている。

ミズキ先生と交際している者であるという事も考えられるが、それならばピアスは右耳についているはず。ピアスは男女でつける耳が異なるのだ。

きつと奴も慌てていたのだろう。そのせいで、いつもと同じ位置にピアスを付けるといふ致命的なミスをしていることに気づけなかつ

ただ。

「権田原さん、お願いがあるの。一緒に里を抜けてくれないかしら。」

頬を染めながら、上目遣いでこつちを見てくるミズキ。

なるほど。どうやらおれは追っ手が来た時の囿役として、ここに連れてこられたらしい。

駆け落ちでも装うつもりだったのだろう。作戦としては悪くない。

ミズキが権田原を選んだのは、日頃から彼が女性に縁がない事を十分知っていた為か。

彼にとって災難だったのは、連れてきてしまったのがおれであること。

彼の作戦は二日続けて失敗に終わってしまった事になる。

このまま男の化けた女の可愛らしい仕草を見るのも気色悪いし、なんだか可哀想になってきたため、取り敢えず変化を解いてやることにしよう。

そこまで考えると、未だ上目遣いでこちらを見つめ続けるミズキを手近な大木に蹴っ飛ばした。

女の正体は、予想通りミズキであった。

急に障害物にぶつかって肺の空気が漏れたのか、苦しそうにむせっている。なんともいい気味である。

そうだ。ここでこいつをぶちのめして引っ張って行けば、よりおれの疑いも晴れるのではないだろうか。

彼には申し訳ないが、おれの無実の為の証拠品となってもらいたいと思う。

「て、てめえ、気づいてたのか…っ！」

「いや。おれです。うずまきナルトです。ミズキ先生。」

フラフラと立ち上がりながら悪態をつくミズキに、正体を現しつつ軽く自己紹介をしながら、拳を叩き込む。

風遁・飛蓮段。

風の性質を借りてパンチの威力を上げる、単純な術。相手は死ぬ。

おれに殴られたミズキは木を三つほど突き破って、先程とは別の大木に激突。そのまま、動くことはなかった。

「あなたの罪は一つ。おれを侮った事だッ!!」

背中に担がれた風魔手裏剣。長年連れ添った彼の相棒であるが、結局最後まで使われることはないままであった。

その後、事件は何事もなく収束した。

ミズキが直ぐに口を割ったらしく、とても迅速な終幕であった。

主犯のミズキは終身刑。何やら精神的におかしくなっているらしく、処刑にするほどの危険性は無いと判断されたそうだ。

勿論、元々無実のおれはお咎め無しだ。

権田原先生を眠らせた件についても、それとなくミズキのせいにしておいたため、特に注意される事もなかった。

その上、ミズキを自分の手で捕縛したおれには報酬が出るらしい。裏取りもせずに手配した事に文句をつければ、金額のかさ増しも可能だろう。

なんとも滑稽な事件であったが、おれは蹴って殴ったらお金が貰えた。素直に喜ばしい限りである。

これで当分は贅沢ができる。たまには焼肉に行ってみるのもいい。波の国で流行っている、げえむとやらを買ってみるのもいいな。

しかし、もうこんなことは懲り懲りだ。自分の無実を証明する為とはいえ、結果として里の為に働いてしまった。

里に借りを作っておくのも悪くは無いはいえ、今後このような事はしたくない。おれは、おれの為だけに生きていきたいのだ。

ましてやおれを差別するクソ里の為に尽くすなど、死んでも御免である。

取り敢えず今夜の飯を豪華にする事を考えながら、ホクホク顔で木の葉総本部を後にしたおれは、その時、ある一つの可能性を見落としてたことに気づいてはいなかった。

同時刻。本部の会議室でとある話し合いが執り行われていた。

「今回の件、どう考える?..」

「まさか落ちこぼれの生徒が中忍である教員を倒すとは…にわかには信じられませんな。」

「しかし…とても偶然とは思えん。見ろ。ミズキの傷を。手加減されているのがわかるだろう? 奴には中忍を相手にしてもなお、余裕が

あつたという事になる。」

「それでは、今までの成績は…！」

「ああ。前例が無いため受け入れ難いが…奴はわざと悪成績を取り、アカデミーに残り続けていたと考えて然るべきだろう。」

「授業では手を抜いていたというのか…！なんて奴だ！」

「落ち着け。今話し合うべきは、優秀な忍、それに人柱力でもあるうずまきナルトをこのままアカデミーで腐らせておいていいのか？という事だ。」

「と、すると…彼の処遇はやはりここに落ち着きますか…！」

「ああ、問題ないだろう。」

「クククツ！九尾のガキがいよいよ野に解き放たれんとしているのか…！いやあ、これからが愉しみで仕方ないヨ…！」

「いや、お前は黙れよ。」

彼らの手元には一枚の履歴書があつた。四代目火影の息子であり、封印の巫女、うずまきクシナの血を継ぐ少年。うずまきナルトの名が記されたものである。

そこには、赤く『卒業措置』の文字が刻まれていた…っ！

後日、本部から自分宛に来た手紙を見て、ナルトは発狂する事になる。

容疑が晴れたお祝いに夕食として作ったハンバーグを旨そうに頬

張る彼は、その悲劇をまだ知るよしもなかった。

閑話 一つの時代も友達は必要である。

これは、ナルトがミズキをぶっ飛ばして疑いを晴らした次の日、火影に文句を言いに行った時の話である。

その日、おれ、うずまきナルトは混乱していた。無理もない。今まで必死に隠してきた実力の一端が明らかとなったのだ。

そう。必死に童貞である事を隠してきた高校デビュー生が、とうとう童貞である事、更には彼女いない歴〃年齢である事が友達にバレた時のような、そんな喪失感と情けなさが体に深く染み入るような気持ちであった。

しかも現実はおれを休ませてはくれなかった。死体を蹴るように、さらに追い打ちをかけて来たのだ。

なんと、おれはあれだけ愛していたアカデミーを、卒業試験に合格もしてないのに卒業した扱いにされてしまったのである。

当然のことだが、おれが望んだことではない。里の上層部がおれの意見も聞かず、無理矢理行ったことだ。

確かに、彼らにとつて優秀な忍びの卵をむぎむぎアカデミーで遊ばせておくメリットは無い。しかし、おれは元々忍びになりたくてアカデミーに通っていたわけではなく、アカデミーに通うことこそを目的としていた男である。

この違いがわかるか。

大学受験を例に考えてみるとわかりやすい。

受験生には、将来に目標を定めていて、あくまで通過点として大学を選ぶ人間と、とりあえず大学に入ることを目的に大学を選ぶ人間の二種類が存在する。

後者の人間は、だいたい大学に合格した後授業に出席しなくなり、結果として単位を多く落とす。留年の危機さえある。これは誰のと

は言えないが、経験談である。

今回の彼らの行為は、極端に言えば大学合格だけを目指して受験に望み、見事合格した学生に対して、いきなり社会人として働けと履歴書を投げつけるようなものである。

ほら、おかしいだろ。

おれはその横暴な裁定に不満を爆発させ、火影の構える総本部へと殴り込んだ次第である。

「だから！ワシが決めたんじゃないんだって！皆がそうするべきですってワシに口々に言うものじゃから…判子をついつい押しちゃっただけじゃ!!ワシの意思はそこじゃない!!」

「なるほど…で、本音は？」

「ついにナルトを下忍にできる機会が来たので、これ幸いと鼻歌でウルトラソウルを歌いながらノリノリで判子を押しした…はっ!?ワシは今何を！」

時。
こんなふうには、火影様の部屋でおれがグチグチと文句を言っていた

突如、部屋に一人の少年が飛び込んで来た。

「ジジイっ！ゲーム買いたいから小遣いくれよっ!!!」

これが、後に他里に名を轟かす男、猿飛木ノ葉丸とうずまきナルトの最初の邂逅であった。

「これ！木ノ葉丸！今はエビス先生との修行の時間ではなかったのか！」

「そんなのつまんねえからやめだ！」

「な、何を言っておるのじゃ！これ、エビス!!お主からも一言言っておらんか！」

火影の言葉に呼応するように、入口から一人の男が顔を出した。黒くて丸いサングラスをかけた、痩せた男である。気配の様子から、なかなかの実力者である事が伺えた。

「お言葉でござるが火影様！木ノ葉丸様とゲームのお話で盛り上がってしまいました！その時、あ、あの名作『口寄せモンスターズ』、通称よせモンの発売日が今日であった事を思い出しまして！いてもたっても居られず！拙者の方から進言させて頂いた次第でござるよ！」

「いや、お主の仕業かいいい!!!」

ん？聞き間違いか？

どうやらエビス、と呼ばれた家庭教師らしき男が木ノ葉丸という少年を唆し、火影様からお金を貰ってくるよう勧めた黒幕らしい。

明らかに教職者のすることではない。

教師とは聖職である。迷える仔羊たちを正しい道へ導くべく、常に先頭に立って模範となるべき存在。それが教育者だ。

それが子供を唆して、自分の欲しいものを手に入れようとするなど考えられない。全く。今までそんな教育者なんて見た事がな…

あ。

ミズキがいました。今までの下りはすべて忘れてもらって構いません。教師は割と我欲強い。

「そーゆー訳だコレ！ジジイ！早くしろ！！金だ！」

「ゲームを買うためのお金を木ノ葉丸様に！里の公金から出してもらっても、拙者は全然かまわんでござるよ！！」

しかしなんだ、限りなくダメな匂いがするこの2人に、おれは興味すら抱いていた。一体何故か？

そうだ。

他人に施しを受けることを当然と思う人種。世間一般ではゴキブリのごとく嫌われる、ニートという人種。

彼らは、おれの同類だ。

この後、おれたちは自己紹介をした。その結果、おれは自分の事を殆ど彼らに話してしまった。しかし、不思議と後悔していない。むしろ、彼らの事を知れたことを嬉しく思う程である。仲間って素晴らしいね。

少年、改め木ノ葉丸は、掟や里に縛られる「忍び」という職業に不信感を抱いていた。労働内容についても同様らしく、彼いわく、イマドキ任務とか終わってるそうだ。

また、生まれた家や血筋だけで子供に将来が求められる、忍び社会の暗黙のルールに関しても好ましく思っていないらしい。

火影の孫として生まれた彼は、幼少期から当然のようにその肩書きがついてまわってきていたはず。おれにはわからないが、何をしても自分を見てくれる人が居らず、火影の孫としてしか評価されないのは辛いことだろう。彼なりに何か思うことがあるのだろうか。

そんな木ノ葉丸くんの将来の夢は、ユーチューバーである。

ユーチューバーとは、インターネットを介して自分で撮影した映像を全国に公開し、公開動画に添付した広告料で一山当てようと目論むギャンブラーの総称である。

里にも家柄にも掟にも縛られず、好きなことで生きていく、好きなことで他人に夢を与える、と語ってくれる木ノ葉丸に、おれは強く心を打たれた。

彼の目指す道は決して楽な道では無い。とても危険な、茨の道である。下手したら忍びになるよりもずっと難しい事かもしれない。

しかし、彼の目指す場所にたどり着くためには、真つ直ぐな道を進むしかない。

ユーチューバーに、近道なんてないのである。

彼にはぜひとも成功して、定職につかないまま大金を稼いで豪遊して貰いたい。そう願うばかりである。

木ノ葉丸の家庭教師、エビス。一国の主の孫の家庭教師を任されるほどの腕をもつ特別上忍、いわゆるエリートである。しかし、彼はアニメやゲームなどを異常な程に愛するオタクでもあった。

これは後で聞いた話だが、彼が特別上忍に留まっている理由の殆どは、任務よりも好きなアニメのイベントを優先するためらしい。

また、彼はライトノベル作家としての顔も持っていると言う。

現在とある部誌で九重ゑびすの名で連載中の「義妹が突然押しかけてきたのでござるが。」は、火の国以外にも大勢のファンがいるほどの人気作で、本屋によつては売り切れている事もあるらしい。一卷はただ今重版中だ。皆さんもお一ついかがだろうか。

おれも一度読んでみないかと薦められたが、あまりにもタイトルが酷いため丁重にお断りしておいた。

あと、これだけは言っておきたい。彼は「拙者」や「〜でござる」などの、伝統を重んじる忍びが使うことが多い言葉遣いをするのだが、何故だろうか。妙に似合つてて気持ちが悪いのだ。

気になつたので彼に聞いてみると、この口調のキモオタ（気持ち悪いオタク）は少なくないらしく、彼らの界限の中ではごくごく一般的な喋り方らしい。

忍びの伝統とは何だつたのかと言いたくなる。

エビス先生はライトノベルである程度稼いだ後は、ファンの中で適当に可愛い女性を見繕つて結婚して家事を任せ、自分は時たま新作を書くだけの印税生活を送るつもりらしい。大変、素晴らしい心掛けである。

おれは、木ノ葉丸と義兄弟の契を結び、エビス先生のことを「先生」と呼んで敬うことにした。

アカデミーに居られなくなったことは非常に遺憾だが、そのおかげで今日の出会いがあったのだと思うと、あまり悪い結果ではなかったのかもしれない。

何せ、一人だつたおれに二人も友達ができたのだから。

この後、買ったゲームソフトをどちらが先にプレイするかを巡って
木ノ葉丸とエビス先生の間で一悶着あったのはまた別の話。

第六話 七つて数字をラツキーセブンつて最初に
言った奴。ちよつとこい話がある。

一体、おれはどこで何を間違えたのだろうか。

そんな事は分かっている。意気揚々とボコボコにしたミズキを突き出した事だ。

少し考えればわかるはず。アカデミー生が教師を捕縛するなど明らかに普通ではないということくらい。

その傷口から、手心を加えた事に気づかれる事くらい。

連鎖して、おれが今まで実力を隠し、敢えて卒業を遠ざけていた事が判明する事くらい。

おれは何故そんな単純な可能性に気づくことができなかつたのか。普段のおれなら絶対に犯しえない過ちである。

そうだ。認めよう。

おれはあの時、自分に酔っていたのだ。柄にもなく、ミステリの主人公のように推理するおれカッケーなんて思ってしまった。

一瞬だが、自分は探偵に向いているんじゃないかとすら思ったほどだ。

九尾探偵社つて格好いい響きじゃない？とか考えてしまったのだ。とんだ黒歴史である。それも、思い返しては布団で暴れたくなるタイプのやつだ。

こぼれたミルクは元には戻らない。白い服に零したカレーのシミは落ちない。

今回の件で、おれの実力が曲がりなりにも上に認められてしまった。

四年目にして、おれはどうとうアカデミーを卒業してしまったのである。

あの事件から二日後。おれはアカデミーに登校していた。行きたくなんてなかったが、木の葉の狗であるイルカ先生に文字通り引張って来られた。彼は満面の笑みを浮かべていた。楽しそうでありである。

今日は合格者ガイダンスが行われる日。卒業試験に合格した生徒達の、三人一組の班が発表される日である。

そして、各々のチームの担当上忍が発表される日でもある。晴れておれたちはアカデミーの庇護下を離れ、担当上忍の仮の部下となる訳だ。

全然晴れてではない。おれにとってはハリケーンものである。

その後は担当上忍の手によって、真の卒業試験が執り行われる。

これに不合格を食らうと、下忍として働くにはまだ早いと判断され、アカデミーに送り返されることになっている。

もはや言葉にするまでもないだろうが。おれにとって最後のチャンスが、この真の卒業試験である。ここは何としてでも落ちて、アカデミーに戻りたい。

しかし、これはチーム戦だ。もし優秀な生徒と組むことになれば、おれが幾らふざけようが合格してしまう恐れがある。それだけはあつてはならない事だ。

そのため、おれはできるだけだけへボチームに所属すべく、精一杯人事を尽くすことにした。

具体的に言うと、神頼みである。

今おれは一番後ろの席で、湯隠れの里で取れた最高級の岩塩を皿に盛り、自作の油揚げを神棚に供え、ひたすら二礼二拍手一礼を繰り返している。

油揚げを供えたのは、狐の神様にお問い合わせをするためだ。おれは狐と精神的に同居しているため、ご利益があると考えた次第である。

周囲の、なんで試験に落ちたはずのこいつがここに…！とか、こいつ何してるんだ…！みたいな視線が凄いが、不思議とあまり気にならない。きつと狐の神様が守ってくれているに違いない。

「おーし、お前ら全員揃ったなあ！今から待ちに待った三人一組のメンバーの発表をするぞー！結構頑張って相性とか考えて組んだから、文句言ったらぶっ飛ばすからなあ！」

教室にイルカ先生が入ってきた。ついに組み分けが始まってしまった。此処は魔法使いの学園ではなく忍びの里なので、自動で組み分けを行ってくれる不細工な帽子はいない。

あれ、どうにかして作れないものだろうか。便利だと思っただが。

「…では次！第七班！春野サクラ！うずまきナルト！」

…あれ？あれあれ？

何故だ！何故あの正論機関銃とおれが同じ班になった？

あいつは確かくのークラスでも山中ののに並んでトップクラスの実力者だったはず。まずい。これではおれの下忍試験脱落計画に支障をきたす恐れがある。

おかしい。おれはちゃんと人事を尽くした筈だ。人事を尽せば天命は自ずと良いものになるって、とあるキセキのバスケットボールプ

レイヤーだつて言っていたというのに。

いや、落ち着けうずまきナルト。まだあと一人いるじゃないか。

そうだ。何を焦ることがあったのか。ここでどうしようもないくらしいの無能が我が班に配属される可能性は十二分にあると言えよう。先ほどイルカ先生はバランスを考えて班を決めたとおっしゃった。おれの成績を最下層だとしても、春野サクラの加入によって、おれという底辺は打ち消されたも同然だ。

ならば自然と残り一名は平々凡々の一般生徒、すなわち雑魚が選ばれるはず。いや、選ばれなければならぬ！

それによく考えてみる！七という数字は幸運の象徴だ。ラッキーセブンというだろう。間違いない。これは勝った。

春野サクラには悪いが、ここでおれたちは脱落する。

神に祈れ！狐がおれにはついている！！

※因みに、ナルトの思考は極限状態下で加速しており、この間約一秒しか経過していない。

「ラストおー！うちはサスケ！第七班はこの三人だな！」

：

神よ。神よ。

どうして私をお見捨てになられたのですか？

「…イルカ先生。流石にこの班分けはおかしいかと思えます！おれの成績がドベなのは100も承知ですが、だからといって不動の1位

と、くの一トップクラスを同じ班にしますかね、普通。バランスはどうしたんですか？偏ってませんか？栄養摂ってますか？何か考えがあるならば仰って下さい。ないのであれば班の組み直しを要求します!!」

「あ？勘だけど。じゃあ次の班の発表行くぞー！」

え、スルー。え。なんで誰も何も言わないのか。明らかにパワーバランスが間違っているのですが。

他の班を駆け出し勇者のパーティだとするならば、おれたちの班は勇者どころか魔王軍である。そこを考慮して頂きたいのだが、スルーされたし無理か。

「何の文句がある？血塗られし闇の王たる俺様に相応しい、最強のオーケストラではないか！フハハハッ！我が友、孤狼の戦士ナルトよッ！これからもよろしく頼むぞー！」

「あの、三人一組をオーケストラって言うのやめてくれませんかね。三人しかいないんでバンドくらいしか組めないと思うんですよ。」

「確かに私もバランスの観点から異議を申し立てたいところですが：イルカ先生ほどの方が勘だと仰るなら、この編成で間違いないのだと納得せざるを得ませんね。よろしくね、うずまき君。うちは君。」

「よろしくお願いします。」

ダメだ。誰であろうと何処であろうとディベートを始めようとする春野サクラまで、既に社畜の手に落ちている。彼女は本物か？サクラだけに、イルカ先生のサクラの可能性もあるんじゃないのか？

しかし、彼女も反論しないとすると、もはやこの決定を覆すことはできないだろう。

ああ。なんとということだ。

残念ながら、この時点でおれの計画は頓挫してしまった。流石にこの二人が組んで下忍になることが敵わないなんて、おれがボランティア活動に勤しむくらい有り得ない事だ。もう二度と、狐の神を頼るところはないだろう。

神棚と供えられた油揚げたちが、申し訳なさそうに机の上で横たわっていた。

八つ当たりで倒しましたが何か問題があったら連絡くれ。

「それにしても、私達を担当される上忍の方、来るのが遅いわね。もう他の班の担当の方は皆お見えになったというのに。明らかに遅刻だわ。これは何か裏があるって思わない?」

「思いませんね。いろいろ推理したってろくなことないんで。」

そうだ。元はと言えばおれのミスが原因で、こうなってしまった事を忘れるわけにはいかない。

下忍になることは避けられないだろうが、せめてそれ以上にならない為に、無駄なおれT u e e、おれカッキーは封印しておくべきだろう。

これ以上他人に認められたくない。

「フツ…この漆黒の墮天使に恐れをなしたとしか思えまい。上忍と言えど、所詮は人から生まれ落ちた子に過ぎんからな。この俺様に臆するのにも無理もないだろう。」

「うちは君。前から思ってたけど、チームになったからにはその変な

言葉遣いはやめて頂戴よ。今はいいけど、任務の際に支障が出る場合だって考えられるし。一回聞いただけじゃ意味がわからないから伝達が遅れるわ。」

あつ。春野サクラがサスケさんに突つかかった。良かった。いつもの彼女だ。

「ム？何を言っておるのだ、この牝猫は。俺様は今ナルトに話しかけているのだが。貴様の優秀さは認めているが、俺様たちの神域に足を踏み入れているとまでは思っていない。選ばれし血族チカラの能力を持って出直して来るがいい！」

「うずまき君。翻訳をお願いしたいわ。彼、私たちとは異なった文化社会を生きているようだから。」

「おれとナルトは凄い。血継限界バンザイとおっしゃってます。」

我ながらなんて簡潔な翻訳文だろうか。これからこの仕事が続くと思うと今から気が滅入りそうである。

しかしまさか、この二人の相性が悪いとは思わなかった。どちらもエリートなので、なんやかんやお互いを認めあっているのかと思っていたが違っただんですかね。この綻びにつけこめば、脱落の可能性は残されているかもしれない。いや、ないか。

そんなことを考えていると、教室の扉が開くのが見えた。

「はいはい、喧嘩はそこまで。」

ようやく、我らが上司様のお出ましである。

扉を開けて中に入ってきたのは、銀髪の、全体的に顔が隠れた男であつた。なんと、右目しか見えていない。

口元は黒いマスクで覆われており、左目は額宛てで隠されている。世が世なら、街を歩いているだけで公権力のお世話になること間違いなしだろう。

第一印象は、「顔見せろ」である。

「んじゃま、ついてこい。」

目しか見えていない黒ずくめの男がそう言うので、十三歳の子供三人は素直にそれに続いた。

世が世なら近所のおばさまに通報されるレベルの光景であることを追記しておきたいところである。

何故か里がよく見えるテラスみたいなどに連れてこられたおれたちは、今、担当上忍を前に並んで座っている。

「じゃ、まずは一人ずつ、自己紹介でもしていきましょーか。あれだ、好きなものと嫌いなもの、将来の夢もささっと教えてくれ。じゃ、金髪。お前からな。」

ご指名とあらば。(あらばって打とうとした時、まずアラバマ州が変換ワードに出てきたのが個人的に面白かったのでここに書いて置きました。)

「おれはうずまきナルトといいます。好きなものは他人の金で食う飯で、嫌いなものは労働です。将来の夢は宝くじを当てて、一生遊んで暮らすことです。よろしくお願いします。」

決まった。我ながら完璧な自己紹介である。わかりやすいようにある程度一般的な言葉を使いながらも、伝えたい事をそのまま伝える力作だ。

「あ、ああ。わかった。じゃ、じゃあ次。左の女の子で。」

この人。「こいつ、話には聞いてたが、まさかここまでとは……」って思ってるな。これは絶対だ。だって哀しい目をしてるから。

まずはIAPゲット。いい調子である。

APとは呆れポイントの事であり、短期間で五個貯まるとアカデミーに送り返される。勿論、おれの妄想であり、そんなものは実装されてない。

「私は春野サクラと申します。好きなもの……と言うより好感が持てる人は時間厳守のマナーを守れる社会人の方で、苦手な人は時間に遅れる社会人の方です。将来の夢は医療忍者として一人前となり、火影とまでは言いませんが、里の運営に携わる忍びになることです。よろしくお願いします。」

う、うわあ。

「ハハハ、手厳しいなあ……気をつけるからそう怒んなって。」

コトコトうるさいぞ。シチューか、お前は。上忍の方も冷や汗をかいている。人のことを言えた立場ではないが、おそらく彼女に友達はいないだろう。

「それと付け加えておきます。私は、人任せでやる気がない人も、妙な言葉回しをして自分に酔っている人も苦手です。」

ん？ひよつとしてこれ、おれとサスケのことではないだろうか。
今からチームになるというのに、随分と喧嘩腰だ。

おそらく、一位だったサスケに対抗意識でももっているのだろう。
それならばせめておれには優しくして欲しいものである。

「フハッ！なあにナルトよ。気にすることはないぞ！その牝猫は気まぐれでな。本当は俺様たちと共にアカシックレコードを刻みたいのだが、狭い鳥籠から出るのに怯えているのだ！愛いぞ…愛いではないか！ククク…おれの右目もそう言っている…！」

「うずまき君。翻訳。」

あの。人任せなのはどっちですかね。ゴンザレス先生のブーメラ
ンパンツを投げつけてやろうか。

「お前は素直じゃない。ホントは友達になりたいけど歩み寄るのが怖い。可愛い。右目痛い。とおっしゃってます。」

「か、かわつ…！」

「なんだ。仲いいなお前ら。」

仲良くない。断じてだ。

「じゃ、うちの奴。よろしく。」

「フツ…人に名を尋ねる時は、まず自分から名乗るものではないか…？」

「アツ、ハイ。」

サスケエ！相手、上忍、上忍!!

なんでいつものやってるんですかねえ。マスクのお兄さんもびつくりだ。

「あー、おれははたけカカシってもんだ。好きなものは…うーん、まあ色々で、嫌いなものも色々だな。将来の夢って言ってもなあ…ま、よろしく。」

え。名乗った。サスケ凄い。

しかしこれでは名前しかわからないが…この里に生きる人間としてはそれだけで充分だろう。

コピー忍者のはたけカカシ。あのバケモン、イルカ先生に勝るとも劣らない傑物である。アカデミーを飛び級で卒業し、おれくらいの年には既に上忍になっていたという。多くの術に精通しており、術の数だけでいえば三代目の次に名が上がるらしい。

暗部に所属していた経験もあり、まさに非の打ちどころのないエリート忍者。同じエリートでも、エビス先生なんて彼から見ればただのキモオタだ。

まさかこんな有名人が派遣されるとは思ってもいなかった。里の、おれたちの班に対する期待は相当なものらしい。

「あなたが、かの有名なはたけカカシさんでしたか。先ほどの無礼、大変申し訳ありませんでした。しかし、今度からは時間は守って下さいね?」

「ああ。気にすんな。善処する。」

サクラさん。名前がわかった途端変わり身早すぎである。きっと彼女の得意忍術は変わり身の術だろう。

「なるほどッ！あののはたけカカシか！それ程の器でなければ、俺様は御しきれんと見たか！ハッ！木の葉めッ！賢い選択をしたな！」

だからお前は何様だ。早く自己紹介しなさい。カカシ先生が困ってます。

「よかろう。では満を持って俺様も名乗るとしようか。」

シュバツ!! (コートをはためかせる音)

スツ!! (左手を右目に当てるポーズ)

「聞いて驚くがいいッ！この地上より遥か上。そう、天界。おれはそこに生まれ落ちた。富、名声、力。そこには全てがあった。しかし！天界ですら俺様には狭すぎたッ！罪を負いし黄金の林檎を好んで食し、自ら望んでこの地に降臨した！刮目せよ！驚嘆せよ！そう！この俺様こそが二代目ルシフェルにして先代を遥かに超える者!?!漆黒の墮天使??うちはサスケだ!!」

な、長いっ…！おそらくその場にいる全員がそう思っただろう。途中から何を言っているのかわからなかった。天界ってどこだよ。ラピユタか？

「えつとだな…名前と、好きな食べ物かリンゴってことしかわかってないんだが…嫌いなものと将来の夢語ってくれる？一応、ルールだからね。」

「…フン。いいだろう。疎ましいものは実力のない者。将来の夢…などという言葉で終わらせるつもりは無い。これは遠い未来にて事実となる…!」

「俺様は、この地に天界を再構築したい。兄である、カオスエンペラー混沌の皇帝と共に。」

あ。天界ってうちはか。

第七話 戦闘回は文字数が増えがち

一日の始まりは気持ちのいい挨拶から。こんにちは。ナルトだ。
昨日は本当に厄日だった。

幸運の象徴とは名ばかりの最凶最悪第七班に配属され、手間と暇と金をかけた神頼みセツトはただの可燃ゴミと化した。

もしもこの世界に神がいるとするならば、きつとおれはあらゆる異能を無効化する副作用として、幸運をも全て打ち消してしまう不幸な右腕でももっているのだろう。

この右手で触れたら、我が班の墮天使さん、どこかへいつてくれなものだろうか。

『てなわけで、明日は朝から実戦演習なく。ゲロ吐くから朝飯は抜いて来いよ。』

これは、昨日の自己紹介の後に、カカシが言っていた言葉だ。「演習」などという言葉でごまかしてはいたが、この実戦演習こそ例の真の卒業試験だと見て間違いないだろう。

彼がどんな試練を課すつもりなのかは知らないが、いずれにせよこの試験で下忍になるに相応しい人材か、そうでないかが決定される。

勿論、おれは下忍になるなんてまっぴらゴメンだが、あいにく班に上位素材も顔負けの上質なエリートを二名も抱えてしまっているのが現状だ。

あれ、試験いらないんじゃないやね？

まあそれは置いておこう。ここからはおれの個人的な考えだが、昨日の彼の「吐くから朝飯抜いて来い」という忠告は、試験内容に大きく関わってくると予想される。

今から忍にならんとする生徒に対して、「修行キツイから飯抜け」なんてほざくコーチがいると思うか？ 答えはノーだ。

「死んでも食え。血肉になる。」とでも言ってくれた方がまだ安心できる。

残念な事に、忍者はブラックかつ体育会系の職業だ。社畜の鑑ことイルカ先生を思い出してもらえれば、理解していただけることだろう。

では、なぜカカシは飯を食うなど言ったのか。

まず、食欲の話しよう。

育ち盛りのおれたちにとって、三度の飯は命の次に大事だと言える。人間に元来備わっている三大欲求先輩だって、食べることは大事だと、腹の虫を鳴らすことで日々おれたちに伝えてくれる程だ。

もし、仮にだ。朝ごはんを食べずに試練に臨んだとしよう。その結果として、試練が進んで昼になっても昼飯を食べさせてもらえなかった、あるいは食べさせてもらえないことが事前に発覚したとすればどうだろうか。

おれは、正気を保てる自信がない。

なにもおれが、特別我慢の出来ない残念な子だと言っているわけじゃない。サスケや、あのサクラにだって同じことが言えるだろう。

空腹は人間の思考力と身体能力を低下させる恐ろしい状態異常だ。ポケモン不思議のダンジョンをプレイした事がある人なら、あの恐怖に覚えがあるはず。

もしや、彼の狙いは、おれたちを飢えさせて判断力を鈍らせることにあるのではないか。あるいはご飯が食べたいという欲望を利用して、仲間割れに誘う事が目的なのかもしれない。

例えば、テストをクリアした者だけが飯にありつけるとか。あらかじめクリア人数に制限を設けておけば、より効率的に争わせることが可能だろう。

おれたちはほぼ間違いなく、限られた食糧を取り合つて喧嘩をする。昼ごはんが食べたいからだ。

そうなつてしまえば後は簡単だ。忍びとして最低限必要不可欠なチームワークを欠いているとして、アカデミーに送り返すだけではない。

あくまで噂だが、今までカカシの試練を突破したものはいないと聞いたことがある。彼の試練の内容がおれの想像通りだったとすれば、その結果にも納得がいく。

この試練、思ったよりハードだ。

さて。ここまで考察してみた上で、一つ皆さんに聞きたいことがある。

おれ、朝飯食つていくべきかな？

考えてもみて欲しい。これはチャンスだ。

当初の考えでは、エリートが二人もいるこの班がアカデミー行きになる確率は0であったわけだが、どうやら違ったようだ。

もし神頼みが効いたのだとしたら、アカデミーのゴミ箱に突っ込んだ某セットを丁重にお迎えにあがる必要がある。

あとは、いかにうまく奴の手のひらの上で踊れるか。これがキモになってくる。

はたけカカシはまごうこと無き賢者であるため、おれ程度の演技は見抜かれると予測される。ミズキやゴンザレスとは格がちがうのだ。つまり、不合格になるためにはおれは本当に腹を空かせる必要があるし、チームメイトと全力で戦ってでも昼飯を手に入れる必要がある。

ここで、全力を出してしまえば合格させられないか、という懸念も生じる。

だが、いくらおれが優れているとは言っても、所詮は中忍レベル。それに彼が重きをおいているのは心の強さとチームワークだ。個人技を理由に合格させられることはないと思っただろう。

結論が出た。

おれは朝飯を食べない。

所変わって本日の集合場所。昨日と同様に、時間になってもカカシの姿はない。

「わかってはいたけれど、今日もはたけ先生は遅刻のようね。勉強道具を持ってきて正解だったわ。」

「フツ。煩わしい牝猫だな。少しは静かにできんのか？俺様は今、金糸雀の囀りを愉しんでいるのだ。頼むから邪魔はしてくれなよ。」

「サスケ。よく見る。あれは鳩です。」

今日も二人とも絶好調だ。サクラはどうやら医療忍術の勉強をしておきたいらしく、専門書を何冊か持ってきている。

サスケは言わずもがなである。本日はおれたちの目には見えない微細な何かを啄んでいる鳩に、金糸雀などというキラキラニツクネームをつけて遊んでいる。楽しそうで何よりだ。

「何を言っている？孤狼の戦士ナルトよ。貴様にも見えるだろう？金色の羽根に包まれた、あの美しき天使の姿が。」

「鳩。ハト科ハト目に属する鳥類の総称。世界には約42属290種類が存在する。体に比べて頭が小さく、胸骨、胸筋が発達してずんぐりとした体型が特徴。断じて美しい天使ではない。」

Wikipediaを参照しろ。コピペさえしなければ、大方有能なサイトである。

そういえば、二人に尋ねておきたいことがある。

試練に臨む上で、彼らが同じ土俵に立っているかを確認しておきたい。

「君達は今朝、ご飯どうしました？昨日カカシ先生が抜いてこいと仰ってましたが。」

「え、食べてきたけど。」

はっ？

「わりーわりー。途中で横断歩道を渡れそうになかったお婆ちゃんが生居てなあ。おぶって家まで送ってたら、この時間だ。」

結局、カカシが現れたのは集合時間の二時間後だった。前から思っていたが、知らないお婆ちゃんをいきなりおぶる奴。一体どんな神経をしているのだろうか。

その間、サクラは勉強、サスケは昼寝。おれは暇だったのでサクラの持ってきたテキストを読んでいた。

将来カンペキなヒモになる為にも、医療忍術は身につけておいて損は無い。一家に一つはある、救急箱を買わなくて済むからだ。

「よーしお前ら。今から早速、実戦演習を始めるぞ。」

おれたちが連れていかれたのは、木の葉の外れの草原。もう少し進めば、おれがミズキをぶっ飛ばした思い出の森に入りそうな場所である。

さて。いよいよ本番だ。仲間割れの準備はいつでも出来ている。

演習を始めると言ったカカシは、何やら掌に鈴を二つ持っている。お婆ちゃんを背負った時にジャラジャラ言わなかったのか気になる。ところであるが、心に留めておくことにしよう。

「なに、やるのは簡単なことだ。お前らには、この鈴を俺から奪ってもらおう。制限時間は正午まで。見事鈴を取れたやつは、晴れて下忍になれるって寸法だ。しかし、見ての通り鈴は二つしかない。つまり、お前らの中から必ず一人は脱落者が出るわけだ。その一人は下忍にならない上に、丸太に縛り付けて、俺が目の前で弁当を食うから。」

聞き間違いだろうか。必ず一人脱落するって聴こえたような気がしたのだが。

「朝餉を食べてくるなど仰っていたのはそれが理由ですか。やはり食べなくて正解だったわ。」

そこじゃないだろ。もはや飯のことなどどうでもいい。一人脱落の件について喋ってくれないだろうか。幻聴かもしれないと気が気じゃない。

「卒業試験以外に審査があるとは予想外だったけれど。それも、一人は必ず脱落者がでるなんて、いい性格してらっしゃるわね。これは負けるわけには行かないわ。」

「フハッ。初めて意見が一致したなあ！牝猫よ！悪いが貴様には俺様の進化の為の礎になってもらおうか！この、漆黒の墮天使、うちはサスケ様のなア!!フハハハハハッ!!」

「墮天使って進化する種族なんだ。虫みたいですね。」

いや、あれは正確には変態か。
じゃなくて。

これは夢か？ほっぺたをつねる。痛い。お腹も鳴っている。夢じゃない。

飯を食える人数に制限はあるだろうと思っていたが、まさか合格者に制限があったとは。これなんて奇跡。

演習はあくまで実力テストであるため合否には関係なく、三大欲求である食欲を押さえ込める忍耐力と、譲り合いの精神こそが着眼点だとばかり考えていた。

考えすぎだった。裏を読みすぎたか。

鈴が取れない奴は問答無用でクビ。飯抜きはおまけ程度の代物だったのである。

「わかったら始めんぞ。三分後にスタートな。各々作戦や準備をしておけ。言っておくが、殺す気で来いよ。」

そう言い残すと、彼はミズキの墓場へと消えていった。

「しかしああは言ったものの…上忍相手にまともに戦ったって、鈴が取れるとは思えないわね…ここは三人で協力するのがセオリーだけだ…」

「ああ。必ず一名が墮天すると告げられたこの状況下で、俺様たちに残された道は一つ。己の能力^{シキル}だけで楽園へのチケットを手に入れるしかあるまい。」

「ならば墮天するのはあなたで決まりね、墮天使さん。得意分野でしよう？落ちるの。」

「フツ。これだから闇を知らぬ者は。墮天使が更に墮天したら格好がつかんだろうが!!」

「あらそうでしょうか。一度落ちたのだから、二度でも三度でも同じでしょう？あなたは深淵を目指すといいわ。頑張つて。応援してるから。」

始まってしまったか。一人は必ず脱落すると決められた事による弊害。そう。仲間割れである。

しかし奴は一つミスを犯した。

ここに一人、ぶつちやけ下忍になりたくない人間がいると言う事を忘れていたのではないか？

そう。おれである。

「まあまあ皆さん。争っていても始まりません。ここは一つ協力して、鈴を取りに行きましょう。脱落者はおれでいい。皆さんと違って、おれには目標がないですから。」

「だがしかしな、ナルトよ。そういうわけには…」

「ここで争っては彼の思うつぼです。協力しなければ鈴は取れません。そうでしょう?」

「確かにうずまき君の言う通りね…でも彼だけに負担がかかるのは納得が行かないわ。やっと卒業できたのに。」

「そうだな。だが話は鈴の音を聞いてからだ。終焉を迎えた後に、仮面の男を説得してみよう。」

余計なことはしなくていい。おれはアカデミーに帰りたいんだ。

さて、これで方針は誘導できた。お腹は空いているがなんてことは無い。ここさえ我慢すればアカデミーに戻れるのだから安いものがある。

「じゃあ作戦はごうしましょう。まずうちは君が…」

俺の名ははたけカカシ。好きなものは色々で、嫌いなものはまあ、色々だ。将来の夢って言ってもなあ…。

俺は今、受け持つことになった生徒達に最後の試練を課している。このテストは二つしかない鈴を三人の生徒に狙わせるものであり、一人脱落者が出ると明かすことで、生徒達から協力という選択肢を奪うものだ。

協力しなければ、当然鈴を奪うどころか、触れることすらできない。まとめてアカデミーに逆戻りだ。

協力さえしていれば、その時点で合格になるというのに。

忍にとって最も大事なものは任務であると考えられがちだが、もっと大事なものがある。

そう、チームワークだ。

仲間を大事にできない奴は、忍どころか人間ですらない。

これが、俺の忍道である。

故に、俺は今かなり戸惑っている。

なんと、生徒達が最初から手を組んで勝負を挑んで来たのだ。付け焼刃だが作戦も練ってきたようで、動きに統制が見られた。

一人落ちると言ったのが聞こえなかったのだろうか。何故奪い合わない？何故個人プレーをしない？疑問は溢れるばかりである。

いずれにせよ、試験開始時間から数えて十分。彼らの合格が確定した。

だが、こうは思わないか。

この時点で合格を言い渡すのって、それってどうなんだと。

今から彼らを教えていく立場として、流石にやばいんじゃないか。舐められるんじゃないか。

俺にだって、今まで一人も合格者を出さなかった男としてのプライドがある。大事な大事なプライドだ。

ここで彼らに「ゴークあつー」と笑顔で告げることは可能であるが、男としての矜持がそれを許してはくれないのである。

故に、俺は戦う。

合格を告げるのは、彼らを叩きのめした後で良いだろう。

「鈴は取ることが出来なかったけど、協力出来た事を評価する。チームワーク大事。」

よし。この路線で行こう。その方が強者感がでて尊敬してもらえそうだ。

そして戦闘に至るわけだが…こいつら普通に強くね？

おじさん本気出すしかない。

さて。試練開始から十分程度が経過した。

チーム暗黒騎士団（サスケが勝手に決めた）の三人は見事はたけ力カシを補足し、現在戦闘進行中だ。

おれたちが決めた作戦はシンプルなもので、簡単に言うとおれを囮にサスケと春野サクラのダブルエリートが鈴を奪うというもの。

今は裸の美女に変化するおいろけの術でおれが彼の気を引きつつ、二人が体術を駆使して鈴獲得に挑んでいる。

春野サクラはゴキブリを見る目でこつちを見ていた。

「アインツ！ツヴァイツ！！」

…。サスケの掛け声が響く。

マヌケな効果音とは裏腹に、その技術は目を見張るものであった。

地形を巧みに活かして先生の行動範囲を制限しつつ、舞うような連撃を繰り出す様は見事と言わざるを得ない。

「決めてやる！時計塔の螺旋階段！！」
クロノグラフ・アーカイブ

地面に手をついたサスケが、カポエイラの要領で蹴撃を放つ。その姿は某海賊王のコックさながら。相変わらずのバケモンである。技名はよくわからない。

「やるじゃないのー！」

しかし、さすがは名の知れた上忍。

カカシは難なくこれをジャンプして回避する。反射速度おかしい。

だが、これは読んでいた。

すかさず、木の上から気配を殺したサクラがチャクラをまとった手刀で頸動脈を狙いにかかる。殺す気で来いと言われたからか、その攻撃に迷いは見られない。

「死になさい！！」

ズバツ！という炸裂音と共に、カカシの首が落ちる。しかしこれは

：

「ッ！代わり身の術ッ!!」

そう。汎用忍術にして、原作にてこれ以降余り出番のない可哀想な術である。

「フハッ！どこへ逃げた!!」

「逃げねえよ。」

瞬間、気を抜いたサスケが、カカシの蹴りによって吹き飛ぶ。大木に激突して姿を現したのは…

「何！ナルトだと!!」

そう。このおれだ。裸の美女が消えていることに気づかなかったか？それとも目をそらそうとしていたのか。とても汚いギミックなので、金輪際使用するつもりはない。

「馬鹿め!!俺様はこっちだ!!」

炎の玉を周囲に纏い、その目を紅く光らせたサスケが、木の裏から姿を現す。

写輪眼、発動。

「なんだと！少しまずい！」

「この技を目にして生き延びた者はいない!!神の目を、血を捧げろ！祭壇に闇を灯せ！さあ、光は鎖された！」

サスケの放った炎玉が、カカシの周囲を円環する。やがてそれは中心へと集約して行き、一つの形となった！

「ルシフ・メモリー墮天使の幽遠ツ!!!」

爆音。その後に、視界を炎の柱が支配した。

環境破壊に大気汚染。サクラへのフレンドリーファイア。
うん。これはひどい。

「クハッ！やったか!？」

サスケさん。それはフラグです。

ジュツ！という音をたてて、炎が消える。タバコの火を始末する時のように、あっさりとおの豪炎は大気に散っていった。

「なん・・・だど?」

彼が驚くのも無理はない。あれだけの大術を受けておきながら、なんとカカシは傷一つ負ってはいなかったのだ。

「馬鹿な・・・なんだ、その術は!!」

カカシを覆うように展開されていたのは、水の神殿と呼んでも差し支えない何か。その術の輝きが、サスケの炎を蒼く塗りつぶしたのだ。

「なかなかいい術を使う。流石はエリートだなあ、サスケ。俺がお前くらいの年の頃よりよっぽど優秀だ。上忍になれるよ、お前。」

カカシが笑う。それはマスク越しにも伝わってくる程の、愉悦の笑みであった。

「水遁・竜宮門。残念ながら、年季が違い。」

はたけカカシ三十路。13歳の子供に対してのガチ戦闘。

その姿は、まるで公園で楽しくデュエルしている子供たちの輪に割って入り、容赦なく叩きのめすガチ勢のようであった。

いや、サスケさんも馬鹿強いんですけどね。

切り札を止められたサスケではあるが、その後も闘いを続行。

しかし、あの術のチャクラ消費が大きかったのか先程までのようなキレがなく、カカシに受け流される一方であった。

普通に逃げ延びてたサクラはサスケとの関係を試みるも、カカシ大先生の雷パンチであえなく退場。彼の大人気なさが臨界点を突破した。

おれはと言えばこのまま負ければアカデミーに帰れるということ
で特にやる気もなく、サクラの気絶をいいことにおいろけの術を多
発。終始カカシの妨害に回った。

が、結局鈴は取れず。

制限時間の正午となり、おれたちの敗北が決定した。ミッションコンプリートである。

「クククツ…魔王^{サタン}め…あそこまで使うか…まさか誰一人鈴の音を聞けないとはな。」

「いやあ、まだまだ子供に負けるわけには行かないんでなあ。」

「…グスン。次はないんだから。覚えてなさいよね。」

「サクラさんサクラさん。はい、ハンカチ。」

サクラの目が覚めた後、おれたちは最初の草原に集められた。カカシ先生による、今回の演習に関する講評のお時間である。

なお、誰も鈴を取れてないということで、飯はお預けだ。もちろん、おれにしかダメージは入っていない。

しかしなんだ、いくらおれはハッピーとはいえど、このテストは難しすぎた。

アカデミー上がり立ての子供が、ガチの大人から鈴を奪えるはずがない。絶対にモンスターペアレントから苦情が来るだろう。

サスケとサクラに関しては、運が悪かったとしか言えない。可愛そうだとは思うが、おれは自分が脱落できればそれでいいので特に抗議しない。

留年、意外と悪いものじゃないぞ。

「では、まずお前らの評価からな。」

カカシ先生が口を開く。サスケは石の上で脚を組み直した。いや。態度。

「フン。話せ。聞こう。」

「お、おう。じゃあまずサスケから。お前、まじでつええわ。中忍の域を超えてる。暗部の奴にも何人かは勝てんじゃね？ただ、術の前の口上は辞めような。」

「当然だ。しかし、口上は悪いがやめられん。あれを口にしないと術はでんからな。」

嘘をつけ。ん？あいつ、そういえば印を結んでいなかったような：マジか。

「確かに印結んでなかったしなあ…。どういう原理かは全くわかんないけど、あれで術のトリガーになってんのか。なんだあれ？うちのの特性か？」

「そうだが、それがどうかしたか？」

今はほぼ滅亡した一族、うちは。その秘密が、またひとつ明らかになった。いや、印を結ばなくていいのずるすぎ。

「いや：何もない。次はサクラだ。お前もサスケとは違うタイプの強さを持つてる。特にチャクラコントロールが良い。チャクラを纏った手刀の精度は木の葉でも上位にランクインできるだろーな。だが、戦闘スタイルが脳筋すぎる。幻術を覚えたらどうだ？きつと役に立つ。」

「ご指摘、感謝します。次はありません。」

良かった。泣き止んでた。ちなみに、おれのハンカチは洗って返して貰おう。

「最後にナルトだが：お前は：うん。真面目にやりなさい。」

「至って真面目でしたが、ここは領いておきましょう。」

おいろけの術の何が悪い？敵が男だろうと女だろうと一瞬判断を遅らせることの出来るスグレモノだぞ？

先日仲良くなったエビス先生から教えてもらったんだ。

「…で、試験だが。普通に合格な。で、中忍試験も出る。鈴とか人数制限とかは、所詮目安だしな。特に一人脱落するってんのに、初めから協力して来たのには目を見張ったわ。お前らのこと、好きになれそーかも。」

ん？今、何と？

お互いの健闘をたたえ合うように、午後の陽射しを浴びながら向かい合う三人。

戦ったからこそ生まれた絆が、そこにはあった。

その横で、一人うずくまる少年がいた。四代目火影の実子にして、三代目火影の弟子。

うずまきナルトの苦難は、まだ始まったばかりである。